



323
203



始



05

雄辯家
史正發句集



✓

323-203



雄辯家必携

史 上 警 句 集



大 日 本 雄 辯 會

大正
5. 12. 25
内交

卷頭言

▼文章家と云はず、演説家と云はず、史乘に現はれて來る英雄偉人の警句を用ゐると云ふ事は、其の文章なり其の演説なりに、一段の光彩を添へる意味に於て、是非とも必要である。從來、坊間に行はるゝことろの格言集とか金言集とか云ふものは、可也見えるやうだが、吾々が實際に臨んで、採つて以つて用ゆべき参考書としては甚だ不完全なものである。

▼本會編輯部に於ては、夙に此の缺陷を補ふべき参考書を行刊したいと云ふ目的で、日本支那を始めとして、英佛獨米伊太利其の他に亘り、廣く東西の歴史を漁つて、其の警句を亂抽した。而してこれを國別にして排列した。

▼此の中には英雄もあり、殉教者もあり、政治家もあり、教育家もあり、あらゆる知名の人物を網羅してゐる。のみならず、附するに英語の原文を以つてし、更に簡単な註釋を以つてしてある故に、便利此上なしである。

▼此だけの編輯を終るまでには、少からざる時日と努力とを要してゐる。版を重ねるに際しては、更に索引をもつきたいと考へてゐる。

▼終に臨んで福田吉藏君が本書の編纂に盡力して下さつた事を感謝する。

大正五年十一月

編者識

目次

日本之部	一
支那之部	八七
希臘羅馬之部	一九三
英米之部	二四九
佛蘭西之部	三七九
獨逸之部	五三五
伊太利之部	五七一

雄辯家
必携 史上警句集

大日本雄辯會編

日本之部

■一州を取るも誅せられ、八州を取るも亦誅せらる。誅は一のみ。

武藏守 興世王

武藏守興世王が平將門に叛亂を勧めた時の言葉である。關東八州の中其の一を取るも誅せられその全部を取るも亦誅せらる。癩、宜しく進んで關東全部を討伐して、此處に覇者たるべしと言ふ。一語何ぞ壯なるや。

■ 壯なるかな、大丈夫此處に宅るべからざるか。

平 將門

將門の未だ叛亂を企てざりし時、一日藤原純友と比叡山に登つた。而して皇城を俯瞰して其壯觀に驚き、大丈夫たる者宜しく天子となりて、此皇城内に居住せざるべからずと不臣の言を洩した。

■ 敵を擇んで進むは豈武臣の爲す所ならんや。

平 重盛

保元の亂の時、清盛は白河殿の西門を守る源爲朝の武勇を恐れ、南門より攻め入らんことを主張した。けれど重盛は之を聞かず、却つて父清盛の説を駁せる言葉である。

■ 寡にして敗るゝも何の恥か之れあらん。今日の事死あるのみ。

平 重盛

源義朝、藤原信賴等、清盛一門の熊野詣の留守に乗じて兵を京師に擧げ、阿部野に兵を擁して清盛等を遊撃せんとす。右は此源氏の軍との決戦を避け、一時四國に赴きて捲土重來を策せんことを主張せる清盛の言を駁せる言葉。

■ 臣の逆賊を誅する之を掌に指すが如し、以て天心を勞せらるゝ勿れ。

平 清盛

平治の亂に際し速かに源家の一類を討滅すべきことを言へる言葉。

■ 年は平治たり、地は平安たり、而して我は平氏なり、勝を獲んこと必せり。

平 重盛

皇城に據れる義朝等の軍を攻めんとせし時、部下の士卒を激勵せし言葉である。

■ 我は源氏の嫡子、公は平氏の嫡子、宜しく與に死を決すべきなり。

源 義平

平治の亂の時義平、重盛を逐ふて紫宸殿の櫻橋を回ぐるごと七回。右は其時之に對して挑戰せる言。

■ 昨與へて今取る、何ぞ速かなるや。

平 清盛

平治の亂に際し、皇城を恢復せし時の得意の述懐。

■ 平氏仆る、盍ぞ其首を梟せざる。

西 光

藤原成親、西光、源行綱等の鹿谷に會して平氏討滅の陰謀を運らせし時一夜宴席の瓶子倒る。一同之を見て大に喜ぶ。蓋し瓶子と平氏と音の相通するを以てなり。

■何ぞ過分と言はんや、公の父但馬守は朝官の齒するを愧づる所。公は其嫡子たり、常に高屐を著け中御門氏に伺候し、人呼で高平太と言ふ。十八九なる比ころばひ、海賊二十人を奪ふるの功を以て四位兵衛佐となり、人以て異數となす。而かも今乃ち太政大臣に至る。是れ之を過分と謂はんのみ。

西光

鹿谷の平氏討滅の陰謀暴露し、縛られて、清盛の前に致されたる時、清盛の彼を罵りて、汝上皇の過分の恩寵を恃んで此非望を致するか、と言へるに對し、此言を以て淨海入道に酬ゆ。

前項参照。

■方今天下の人、平氏にあらざれば人にあらず。

藤原時忠

平氏にして朝官たるもの六十餘人、采邑三十餘州に跨りし平家の全盛を評せる言葉。

■忠ならんと欲すれば即ち孝ならず、孝ならんと欲すれば即ち忠ならず、重盛の進退此に窮まる矣。

平重盛

鹿谷に於ける平家討滅の陰謀暴露せる時清盛憤激の餘り、後白河法皇の宮を圍まんとす。右は重盛の之を諫争せる言葉。

■吾れ幼にして孤、此老の鞠育する所たり。彼をして歸來せしめ之に父事せんとす。今恩を重んじて死に就く、義と謂はざるべけんや。

源義仲

白髮を染めて奮戦せし齋藤實盛の首級の前致されし時、往時を追憶せる言葉。我が幼年時代には此老翁の手鹽に育てられたるに依り、父の禮を以て之に奉仕せんと欲したりしに、今は平氏に對する恩を重んじて戦死す。洵に義を重んずるの徒なりと言はざるべからずとの意を述べたるもの。

■父子相慕ふは貴賤となく一也。父西に在り、子は東に在り、以て相殺滅す、

吾心之を憫む。汝宜しく函すまやかに去つて頼朝に従ふべし。

平 宗 盛

木曾義仲の軍に壓迫せられ一族を擧げて西海に走らんとするに當り、島山重能兄弟を召し、汝等の子弟は皆關東にありて源家の軍に屬せるに、汝等のみ何故に歸東せざるやと問ふ。重能兄弟之に答へ、臣等平家の重恩に背き去るに忍びずと言へるを聞き、其情を憐んで此言をなせり。二人泣辭して關東に歸る。

■臣等が事、已に此に至る。願くば一たび別れを叙して行かん。

平 經 正

没落せる一族と共に西海に赴かんとする時、其幼時奉仕せし仁和寺法親王を訪ひ兼て愛藏せし所の琵琶を彈すること數曲、王と左右と皆泣く。右は其時の言。

■兵の興りてより、君が門に數なるを得ず。今當に遠く別れんとす。聽く君敕を奉じて撰輯する所ありと。臣幸にして一章を收むるを得ば死すとも朽

部 之 本 日

ちす。

平 忠 度

没落の恨みを載せて西海に赴かんとする時、其和歌の師藤原俊成を訪ひて語れる言葉、俊成が敕命を奉じて和歌を撰集せるを聞き、その内に自家の一章を加へられんことを云へるものなり。

■臣等世々君恩を受く。隆替を以て志を易へず。海を窮め天を極め唯君の適あはく所。

宗盛の福原に於て將士を會し將來の方策に就て論議せる時、將士の彼に答へたる言葉。榮枯盛衰に依て志を易ふるは我等が事にあらず。天涯地角君の行く所我等も亦之に従ふべしとの意氣を述べたるものなり。

■燭暗らうして數行虞氏の涙。夜は深し四面楚歌の聲。

平 衡

二句共に橋廣相ヒコカミの作。項羽が漢の高祖劉邦に破られて垓下に一夜かせる時、四面に楚歌の起るを聞き、漢は既に我故郷なる楚人を之れ得たるかと大に慨嘆し、一詩を賦して寵姫虞美人をして和して舞はしむ。鎌倉に囚はれの身となりし重衡が心中の憂悶に堪へず、頼朝に贈られし美

— 7 —

部 之 本 日

— 8 —

姫手と工藤祐經の奏樂に和し、項羽の薄命と我身の不運を思ふて迷懼せる所。

■且夫れ源氏の猜忍、骨肉相食むと、平氏の闔門死に至つて懿親を失せざると孰れぞや。

頼山陽

平家没落の美を言へるもの、高山樗牛も亦口を極めて此美を言へり。源氏の残忍にして疑心深く、骨肉を殺戮して顧みる所なきに反し、平家は一門を擧げて死に至る迄親族間の美德を失はざりしことを稱揚せるものなり。

■武臣天子を衛る利刀なかるべからず。

源満仲

此言を以て筑前の其治某を召致して截鬚、膝圓の二刀を打たしめ、以て源家相傳の寶刀とす。

■將軍忠を天子に盡し野に暴露する十餘年頭髪皆白し。天地爲めに動き將士爲めに奮ふ。虜を破ること河を決するが如し。臣今將軍を視るに髮復半は黒し、若し貞任を獲ば全黒ならん。

清原武則

源頼義の阿倍貞任討伐に當りし時、鳥海柵を抜き將士を會して宴飲せし席上に於て、武則の頼義の風貌を見て答へたる言葉。河を決するが如し、とは堤防を切つて水を流すが如くなりとの意。

部之本日

■好男子、惜むらくは未だ兵法を知らず。

大江匡房

源義家を評せる言葉。義家の藤原頼通の第に於て奥州の戦事を談ぜるを聽き此言をなす。義家之を聽き、彼に就て兵法を修め、其蘊奥を極むるを得たり。

■今夜虜柵陥る、復た營を用ゐず。

源義家

後三年の役、清原武衡、家衡等を金澤柵に攻めし時、嚴寒に營を燒きて其決意を示せるもの。

■善く戦ふ者獨り臣が兄義朝あり。然も臣が一矢之を斃さん。平清盛輩に至つては鎧袖一觸自ら倒れんのみ。

源爲朝

保元の亂の時、崇徳上皇に召されて戦を議せし時、進言せし所。

■唉、長袖の輩、惡んぞ能く兵を知らんや。

源爲朝

— 9 —

— 8 —

部之本日

藤原頼長の爲めに夜襲の謀計を斥けられたるを慨し、此言をなす。長袖は公家を指す。

■ 吾は鎮西八郎にて可也。

源 爲 朝

藤原頼長の彼をして善戦せしめんと欲し、遽に乞ふて藏人たらしめんとせざるを斥け、吾は鎮西八郎にて可、藏人の如き我に於て何かせんと、虹の如き氣を吐いた。

■ 嚮きに叔父八郎藏人を辭して拜せざるは緩急を知れるものなり。吾れも亦姑らく悪源太の號を以てせん。

源 義 平

平治の亂の時、藤原信頼の彼の爲めに官を乞はんとせざるを斥け、此言をなす。前項参照。

■ 帝後ろに在ます、背すべからざるなり。

平 清 盛

平治の亂の時、源氏の軍の六波羅に來襲す。清盛驚きの餘り胃を倒まに着け傍人の之を注意するに及び此言を以て誤覚化せり。天皇の後ろに在すを以て背を向くべからざるに依り胃を逆に着けたりとの意なり。

■ 吾れ何ぞ此に座せんや。

源 義 平

縛せられて六波羅の館に致され椽側につき据えらるゝや、慨然として右の一言と共に自ら起ちて室内に進めり。

■ 命のみ。子の命窮すれば亦此に至らん。吾れ子の大患たり。宜しく速かに殺さるべし。

源 義 平

將に殺されんとするに臨み、清盛の彼に對し、嚮きには三百騎の圍みを脱出し乍ら、今僅かに五十餘騎の爲めに捕へらるゝは何ぞ前に勇にして後に怯なるや、と詰れるに對して答へたる所。要するに運命にして運命に見離さるれば汝も亦子の如くなるべしと言へるものなり。

■ 二兄既に僧たり、吾れ爰ぞ之に倣はんや。

源 義 經

剃髮を斥けたる言葉。二兄とは等しく常盤の腹に出でし今若、乙若の二人にして、各名を全成、義圓と改めて僧となり居りしを指す。

■ 汝は恩を爲し、予は義を爲す。

大 庭 景 能

頼朝兵を擧ぐるの後、安達盛長をして八州の豪傑を歴説せしむ。大庭景親平家に好遇せらるゝ

の恩を言ひて之に従ふを肯せず。兄景能之を非とし右の言を以て頼朝の軍に赴く。

■ 吾れ敕を奉じて義を擧ぐ。汝、何ぞ速かに來らざる。宜しく後陣に在て我命を待つべし。

源 頼朝

石橋山の戦に破れて安房に逃れ房総の地に徇へて再び弱勢を擁して隅田川に進軍し來りし時、平廣常滿騎を以て來り會す。頼朝狂喜して之を迎ふべしと思ひきや、右の一言を以て先づ叱責を加へ以て其氣魄と機略の天縱なるを示す。廣常も亦大に恐れ、此人必ず大事をなすべしと述懐せりと傳へらる。

■ 八幡公の東征せらるゝや新羅公の來援に遭ふて曰く、猶故將軍を見るが如しと。今吾れ汝に遭ふは猶頭公に見るが如し。

源 頼朝

兵を擧げたる時義經の奥州より來援せるを喜びて之に語れる言葉。八幡公は義家、新羅公は義光、頭公は左馬頭義朝、故將軍とは鎮守府將軍なりし頼義。義家の奥州を征せる時、義光の京都より來援せるを見、汝を見るは父君に見るが如しと言ひて八幡公は大に喜ばれたるが、今汝を

見るは尙父君左馬頭義朝公に見るが如しとの意である。

■ 世皆源氏相肉すと言ふ、今吾れ深仇の平氏を忘れ同宗と兵を交ふ。人の笑ひを如何せん。

木曾 義仲

未だ中原を定め得ざるに頼朝と隙を生じ、頼朝十萬騎を率ゐて來り攻む。義仲右の言を以て自ら越後に赴いて戦を避く。木強漢の肚裏一掬の情熱の存するを見よ。

■ 圖らざりき、今日復白旗を見んとは。

義仲の北兵六萬を勅して京師に入れる時、都人士の口に發せられたる驚きの言葉である。今日早くも源氏の白旗を見んとは我等の思ひ及ばざりし所であるとの意。

■ 鼓判官反つて人の撃つ所とならんと欲する乎。

木曾 義仲

後白河法皇の命を齎らし、彼の京都に於ける掠奪を詰責せし平知康を罵倒せる言葉である。知康は鼓判官の名があつた。

■ 進むを求めて尙ほ退くは兵の通患なり。而かも汝退かんことを欲する乎。

源 義 經

南海を征せんとする時、梶原景時の逆構を造らんことを求めたるを斥けて此言をなす。

■ 吾弓をして叔父鎮西八郎の弓の如くならしめば即ち可、然らざれば是れ敵に笑ひを貽すものなり。

源 義 經

義經屋島の戦ひに弓を海上に落し危険を冒して之を取る。左右その身を輕んじて弓を重んぜるを難せる時、此言を以てす。

■ 誓ふ者は昌俊、襲ふ者は二位なり。

僧 昌 俊

昌俊、頼朝の命を受けて義經を其堀川第に襲ひて敗る。後ち捕へられたる時、義經彼が誓約に背けるを責む。昌俊即ち此言を以て答ふ。二位とは頼朝のことである。

■ 我面は即ち二位の面、我面を殴つは即ち二位の面を殴つなり。

僧 昌 俊

義經の怒りて彼の面を殴ちし時、昌俊の答へし言葉。義經其言を壯として命を助けんとしたる

も、昌俊の死を乞へるに依り遂に之を斬つた。(前項参照)

■ 汝は乃ち公の家人。吾を遇すること何ぞ亡状なる。公をして友道を全からしめば、汝我面を知らんと欲するも得んや。

靜 御 前

靜の鎌倉に幽せられし時、梶原景茂醉に乗じて之を挑む。靜大に怒り右の言を以て之を罵る。頼朝公の家來に過ぎざる身を以て、義經の側室たる我を遇することを何ぞ亡なるや、公と我君との疎隔なくんば、汝如き予の面を見んとするも得べからずと、快氣焰を擧げたのであつた。

■ 吾祖祐親、將軍之を仇とし、吾仇祐經、將軍之を寵す、吾れ是を以て怨む。

曾 我 五 郎

富士裾野の卷狩に於て、父の仇工藤祐經を殺し、次で頼朝の幕を侵さんとして捕へられたる時、頼朝の何の故に我を侵さんとはせしと問へるに對して答へたる言葉。頼朝其言を壯なりとして之を赦さんとせるを、祐經の子の哀訴に依て斬に處した。

■ 吾後世必ず天下の權に乗る者あらん。

源 義 家

彼の遺書中に此言ありしと傳へらる。

■妾、汝の夢を買はん。

北條政子

頼朝の伊豆に在りし時、始め北條時政の次女に艶書を送らんとす。次女、一夜鳩の金函を銜んで至るを夢み、之を姉の政子に告げた。政子大に喜び其粧鏡を與へて、妹の夢を買つた。後果して頼朝の艶書至り遂に之と通す。

■彼は將家の胄子、一禽を得るも何ぞ専使を煩はさん。

政子

頼朝の富士の畚野に狩したる時、長子頼家十二歳を以て之に従ひ走鹿を斃した。頼朝大に喜び、使を馳せて之を政子に報す。政子喜ばずして右の語をなす。頼朝大に愧ぢたりと傳へらる。將軍家の跡取たる者の一獸を斃したりとて特使には及ばずとの意である。

■汝我言を聽かざれば、我れ身を以て汝が箭に當らん。

政子

長子頼家の安達景盛の妾を奪ひ、更に景盛を殺さんとせる時、政子此言を以て頼家を責罵し、遂に之を留らしめた。

■廣狹命なり、案檢を費す能はず。

源頼家

土地の訴訟を裁判するに臨み、筆を以て地圖の中央に一線を引き此言をなす。廣狹は運命なり、臨檢する能はずとの意である。

■父老之を安んぜよ、譬ひ年豊かなりと雖も我復責めず。

北條泰時

領民の官債を償ふ能はずして、逃避せんとするを聽き、之を招きて其證券を燒き、大に之を慰撫して右の言をなす。責めずとは督促するなしとの意。

■吾れ復酒を飲まず、疇昔宴に與り其翌亂作る、吾れ甲を擐らして馬に上る

も宿醉醒めず、我れ意らく今より飲を禁ぜんと。已にして戦ひ數十合、渴して水を索め、葛西六郎楯を執て酒を進む。我れ輒ち之を飲む。甚しいかな、吾が常操なきや。

北條泰時

和田義盛の亂を討滅せる時の言。疇昔は昨日。宿醉は二日酔。楯は酒楯。宿醉に懲りて自今酒

を已めんと思ひ乍ら戦後馮を覺へて人の酒を勤むるに遣へば又之を口にす、常の守りのなきも亦甚し、との意である。

■彼が反跡已に明かなり、臣の之を生致せざる所以のものは、將軍の内謁に聽いて之を宥さんことを恐るればなり。

小山宗政

島山重忠の子僧重慶の日光に據て反せし時、之が討伐に向ひし宗政の將軍實朝の優柔を罵れる言葉。生致は生き乍ら送致するの意。内謁は暮夜内密の謁見に依る請願。

■東方の老尼、禮節に嫻はず。

政子

政子の北條義時と共に熊野に詣てんとして京都を過ぎりし時、後鳥羽上皇之を見んと欲して召さる。政子右の言を以て之を拜辭した。

■彼れ人心を收むる此に年あり、之が爲めに死を願ふ者、勝て數ふべからず、臣等をして東國に在らしめば亦籠絡せられんのみ。

莊家定

後鳥羽上皇の北條義時を討せられんとせられたる時、關東の士彼に従ふ者幾何なるやを問はる。家定右の言を以て奉答す。

■子と之を與にせん、願ふに安れの所にか肴を得ん。

北條時頼

大佛宣時の一夜彼を尋れし時、時頼一壺を手にし乍ら此言をなし、紙燭を照らして厨に醬油を得之に依て酒を佐く。その節儉此の如し。

■汝亦北條公の薦事に倣はんとするか。

青砥藤綱

早魃に際し、北條時頼僧を聚めて之に施し、以て雨を祈る。藤綱其牛の水に洩するを見て此言をなす。其意、蓋し僧に施すに其食糜を別たざるを罵れるものにして、廉者は餓死するも來つて施物を受けず、唯徒らに食者を飽がすに過ぎざるを言へるものである。早魃なれば水に洩することなく、水の足らざる田に洩すべきに無用の水上に洩するは、猶時頼の無用の僧に施物を與ふるに異らずと言へるもの。薦事は供養。

■相摸公、天下の直を司りて公文を直とす。汝相摸公を直とせば、公宜しく

報いらるべきなり。

青砥藤網

北條時頼公は天下の司法官として公文を正しとせられたるもの故、汝若し時頼公を正しと思はば宜しく公に報ゆる所あれ、との意。時頼の家人と公文なる者と領地の境介を訴争せる時、藤網の威武に屈せずして公文を勝訴せしめたるを徳とし、公文一夜密かに錢を苞にして、彼の後庭に置き去る。藤網大に怒り右の言を以て之を郵還した。

■五十錢、吾れ之を失ふも人之を得べし。十錢は誰か之を得ん。

青砥藤網

暗夜十錢を水中に落せる時、五十錢を炬火に費して之を探らしむ。右は人之之を嗤へるに答へたる言葉。十錢は之を水中に放置すれば何人をも利する能はざるも、五十錢は予之を失ふも他之を得るを以て敢て憂ふるに足らずとの意。

■神藤網の祿を増せと言ひて之を増さば、神若し藤網の首を斬れと言はゞ之を斬らんか。

青砥藤網

時頼藤網に祿を加へんと欲し、神の夢に現はれて之を命ぜられたりと云へるに對し、藤網の答へたる言葉。

■管子の所謂、階前千里、門外萬里とは即ち是れなり

青砥藤網

鎌倉及諸州の吏の奸狀を時頼に呈して此言をなす。きざはし(階)の前を見て千里の遠方の状態を知り、門前の状態を見て萬里の遠きを知るの意。

■業鏡高懸。三十七年。一槌破碎。大道坦然。

北條時頼

臨終の偈なり。業鏡は禪學を修むる爲めの鏡、自己を鏡に譬へしもの。槌を揮つて之を碎くとは死を言へるもの。大道坦然は一路坦々如として更に心を累するものなしとの意にして大悟徹底を言へるものなり。全體の意は、三十七年の人生を鐵槌一下裡に碎き去れば、忽然悟了して一物の心を煩すなしと言へるもの。

■我首を官軍に獻ぜよ、是れ我が諸君の勞に酬ゆる所以なり。

北條仲時

北條氏の爲めに六波羅を守りて、足利尊氏其他の官軍に將に攻殺されんとするに當り、其兵に斯く云つて自殺した。

■百年の跡、節に死するの一屍なき乎。

安東 聖秀

北條氏の新田義貞に亡ぼされし時、幕府の灰燼に歸せるを見て憤慨せる言葉。北條氏百年の執政の後、一人の節義に死せる者なきかとの意。

■吾が姪は士家の女、何爲れぞ此の無耻の言をなす。 安東 聖秀

義貞の妻女なりし聖秀の姪の彼に書を送りて降を勧めたるを憤れる言葉。

■事已に此に至る、公自ら圖^{はかりごと}を爲せ。雖然、臣猶一快戦を欲す、公且く之を待て。 長崎 高重

鎌倉東勝寺に於て北條高時と共に自殺せんとするに當り、高時に語りし言葉。高重は此言を以て百餘騎を率ゐて、義貞の軍を縦横に馳突し、再び東勝寺に歸りて自殺した。

■天下陛下を容るゝの地なし、獨り此座あるのみ。

後醍醐天皇の笠置山に隠れられし時、紫宸殿の南に大樹ありて樹下に虚位を設け、二童兒來りて此言をなすと夢みて醒め、楠正成を得られたりと傳ふ。

■天誅、時に乗すれば何の賊か斃れざらん。東夷は勇ありて智なし。若し勇を以てせんか六十州の兵を擧ぐるも以て武藏相摸の兵に當るに足らず、而かも智を以てせんか、則ち臣に策あり。 楠 正成

笠置山に後醍醐天皇に召されて奉答せる言葉。

■陛下苟くも正成未だ死せずと聽し召さば、復た宸慮を勞せらるゝこと勿れ。

楠 正成

前に同じ。宸慮は陛下の御心。

■吾れ天下に先んじて大事を擧ぐ。固より生を圖らずと雖も、天子在す。吾

れ未だ以て死すべからざるなり。

楠 正成

赤坂城の命旦夕に迫りし時、衆に訓したる言葉。

■ 吾れ聞く、志士仁人は身を殺して以て仁を爲すと。義を見て爲さざるは勇なきなり。盍を要して駕を奪ふて以て義を擧げざる。 兒島高德

後醍醐天皇の隱岐に流されんとし給ふ時、之を道に要して義旗を懸さんとし、其部兵を激勵せる言葉。要しては待ち受けての意。

■ 天勾踐を空ふする勿れ、時に范蠡無きにもあらず。 兒島高德

後醍醐天皇の隱岐に流され給ふ途中、一夜行在所の櫻樹を削りて書せる所。越王勾踐を助けて國讐吳王夫差を破れる謀臣范蠡の故事を引き、天皇と自己を勾踐と范蠡に比せるもの。其意は天よ願くば天皇を空しきものとする勿れ、世には范蠡の如き忠臣の天皇を思ふ者の存せり、との意を述べて天皇の御心を安せんとしたるもの。

■ 渡部の水いかばかり早ければ、高橋落ちて隅田流るらん。

楠正成の謀略に依て渡部橋畔に大破せられたる北條氏の二將高橋宗康、隅田通倫を罵れる京童の落首。

■ 勝敗之機、離同に在つて衆寡に在らず。

楠 正成

離同は心を合はするとせざると。北條氏の勇將宇都宮公綱を迎へ討たんとせる時の言。

■ 吾れ誤つて此奴輩と事を謀る。奴輩あらずと雖も我れ奚んぞ戦はざらんや。

菊池 武時

後醍醐天皇の詔に應じて北條氏に抗せんとせる時、少貳貞經、大友貞宗の約に背きて、太宰府の將北條英時に款を通ぜるを憤り此言をなす。

■ 何物の牛鬼か敢て義兵を沮まんとはする。

菊池 武時

百餘騎を率ゐて義戦に赴かんとして櫛田祠前を過ぎれる時、馬俄に進まず。武時大に怒り右の言を以て龜(神體を安置せる所)を射れば馬進めり。牛鬼は邪神。

■天馬平世に用なし。近日賞罰信なく、工役繁く興り、文臣内に諛し、武臣外に怨む。而して奸雄變を其間に窺ふ。天馬の出づる鳥いづくんぞ亂兆にあらざるを知らんや。

藤原藤房

建武中興の後、後醍醐帝浸やく政に倦みて復た治平を願みられず、偶々千里の馬を獻する者ありたる時、藤房右の言を以て帝を諫む。豊は間諜。

■今日我軍克つて獲る所少し。寡兵を以て京中に屯すれば鹵掠四散せん。盍ぞ前日の敗に懲りずや。

楠正成

一度尊氏を京都の外に驅逐せる時、新田義貞の京中に屯營せんとせるを駁せる言葉。鹵掠四散は各方面に掠奪を恣まにすること。

■賊衆盛と雖も前役の如きには過ぎず。王師天命あり、宜しく之を外に防ぐべきなり。

藤原清忠

尊氏の九州の兵を擧げて東上し來れる時、楠正成一策を獻じ京都を空うして賊を之に導き以て徐ろに之を討伐せんことを勸む。然るに獨り參議清忠之に反對して右の言をなす。長袖の事を誤る古今一轍である。之を外に防ぐ可きなりとは京都の外に於て防ぐべしとの意。

■汝幼なりと雖も已に十歳を過ぐ。猶ほ能く吾言を記せん。今日の役天下安危の決する所、意ふに吾れ復汝を見ざるべし。汝吾れ已に戰死すと聞かば、則ち天下の足利氏に歸せるを知るべきなり。慎みて禍福を較計し利に嚮つて義を忘れ以て乃父の忠を廢すること勿れ。

楠正成

湊川に戰死せんとするの前、櫻井驛に於て其子正行を諭したる言葉。

■方今戰國、一矢猶愛しむべし。願くば返賜せられよ。本間資氏

尊氏の九州の兵を擧げて東上し、湊川の決戦を見んとせし時、官軍の一人資氏その名を問はれたるに對し一矢を敵船に投じて之に答へ、右の言をなす。

■是れ我が罪なり。士亡ふべからず、法亂るべからず。新田義貞

彼の臣小山田高家嘗て軍に従ひ民の夢を刈る。法死に當る。義貞人をして高家の陣を見せしめたるに鐵馬鮮かにして戰士の用意の間然するなきに唯一粒の粟をも存せず。於是義貞右の言を以て田主に償ひ高家の死を助く。高家感激した後、湊川の戦ひに於て彼に代つて死んだ。

■臣は將種、死せざるべからず。殿下臣と異なる、遽かに自殘する勿れ。

新田義顯

金崎城の陥らんとするに當り、奉じて城中に在りし尊良親王に語れる所。將種は將門の血を享けたる者。自殘は自殺。

■兵を失つて獨り免るゝは我志にあらず。新田義貞

足羽を攻めし時敵兵三百餘騎の包圍する所となり將に戰死せんとせし時の言。

■吾れ今日天下の爲めに賊を討じ、一家の爲めに仇を報ず。新田義宗

武藏野に於て尊氏と戦ひし時の言。義宗は義貞の子である。

■將たる者、上を奉じて下を撫し、運を天に任せて人を尤むる勿れ。

新田義貞

彼の家訓。

■彼れ舊、我家の臣隸のみ、時遷り勢ひ變じ我を僕役するに至る。我れ今日を以て官軍に歸し以て我家を興さんと欲するは如何。足利尊氏

將に北條氏に反せんとせし時の言。僕役は下僕の如くに驅使すること。

■是れ八幡公より傳へて右大將に至り、而して我家之を受く。請ふ以て臚となさん。北條高時

高氏の京都に向はんとせる時、之に源家相傳の白旗を興へて語りし所。八幡公は義家。右大將は頼朝。

■吾れ將に勝つて之を持せんとす。足利尊氏

足利尊氏

尊氏桂川の西に宴を張り一佛舎を指して其名を問ひし時、傍人の勝持寺なりと答ふるを聞き晒ふて此言をなす。將に北條氏に背きて官軍に歸せんとせし時の事である。

■此の如くにして已ますんば、我輩皆奴虜、安くにか一將種を戴いて天下の權を執るを得んか。

建武中興の後、論功行賞其宜しきを得ざるを慨せる武臣等の言葉。其結果朝廷は再び武臣の心を失して尊氏の權勢を大ならしむるに至つた。

■今臣外に勞苦し、内に讒諛の臣あり。是れ趙高秦を専らにして章邯楚に降るの謂にあらずや。

足利尊氏

鎌倉に據て反せんとするに當り天皇に上書して新田義貞を彈劾せし言葉。讒諛の臣は、讒言を逞うする詔護の臣。趙高は云々は秦の佞臣趙高が二世皇帝を挾んで朝政を擅まゝにせるに概し、項羽の討伐に向ひし秦將章邯は、却て之に降りりとの意。義貞を以て趙高に比し自ら章邯に比してゐる。

■我が官位顯達し宿憤を伸ぶるを得る、微功に由ると雖も豈君恩にあらずや。

足利尊氏

その官位を褫奪され義貞以下の諸將の鎌倉討滅に向はんとするを聞き、此言をなし、剃髮世を遁れんとす。而も諸將の周圍の形勢を説いて已まざるを見、遂に意を決して背反した。

■噫、誠に此の如き乎。然らば吾も亦諸君に従ひ弓箭を執て義貞と死を決すべきなり。

足利尊氏

建長寺に赴きて將に剃髮せんとせし時、上杉重能偽りて官書十餘枚を作り、縱令剃髮世を遁るとも足利の族類の誅罰は之を宥さすと書し、之を尊氏に示した。尊氏即ち意を決し法衣を纏き錦袍を穿ちて出づ。諸軍は歡呼して之を迎へた。

■我が弟にして死なば、我れ何ぞ生きることをせん。

足利尊氏

博多の戦ひに於て直義死を決し、衣袖を截ちて尊氏に送り以て訣別の意を表し來れる時の言。■守護は已に之を將軍に得たり。何ぞ此翻覆の繪旨を以てすることをせん。

新田義貞の爲めに攻められし時、城壁の未だ成らざるを憂ひ播磨の守護たるを得ば皇軍に下らんと爲る。義貞之を信じて彼が爲めに守護職の綸旨を得たるも其往復に日子を費し則村の城壁成る。即ち右の言を以て答ふ。守護職は將軍たる尊氏に得たるに依り。翻覆なき天皇の詔の如き我に用なしとの意である。

■若し悪源太をして在らしめば、之を拒ぐこと何かあらん。

東寺に於ける尊氏が本營の義貞の軍に圍まれたる時、尊氏に侍座せし頼氏の語れる所。悪源太は其子頼直驍勇を以て聽ゆ。

■亟かに門を開け、吾れ敢て宮家を敵とする者ならんや。獨り義貞と雌雄を決せんと欲するのみ。

義貞の東寺の北門に迫りて尊氏に決戦を挑める時彼の語れる言葉。而かも遂に上杉重能等の誅

止する所となる。前項参照。

■勝敗は兵の常なり。敵を恐るれば將たらざるに若かず、義詮此に在り。衆を望んで逃れなば天下之を何とか言はん。

北畠顯家の東北の兵十萬を率ゐて鎌倉に來り薄れる時、鎌倉の兵僅かに一萬に過ぎず、諸將銳を避けて安房上總の間に逃れんことを議す。尊氏の子義詮僅か十一歳の少年を以て右の言を以て之を叱咤した。

■古より未だ此に拒いで克てる者あらず。何となれば攻むる者は勢ひ千里の外に伸び、拒ぐ者は力咫尺の内に縮まればなり。

北畠顯家十萬の大軍を率ゐて京都に薄り來れる時、之れを宇治勢多に拒ぐの非を説けるもの。攻むる者云々とは攻撃者は自由の活動範圍を有するも防禦軍は極めて狭小の地域を舞臺とせざるべからざるが故に非常に不利益の地位に立つとの意。

■守つて克つべからず、走つて達すべからず、我れ寧ろ守つて死せん。

三百の弱勢を以て三萬の衆を擁する義貞の爲めに足羽城に圍まれたる時の言。守るも克つの見
込なく、走るも無事に京師に達するの見込なし。我は寧ろ城を死守せんとの意。

■ 吾れ右大將の信賞必罰を慕ふて其多疑酷刑を憾む。汝我意を體して功臣を
猜し且つ吝なる勿れ。

足利 尊氏

治政に關して弟直義と高師直とを誡めたる言葉。右大將は頼朝。信賞必罰は功を信じて之を賞
し罪すれば必ず之を罰するを言ふ。

■ 院乎、犬乎、誰か克く我をして下らしむる者ぞ。

土岐 頼遠

頼遠途に光嚴上皇の行幸に會ひ、院の行幸なるに依り馬を下れと命ぜられて斯く答ふ。足利の
家臣の暴慢想見するに足る。

■ 院且之を下す。將軍に遇へば當に手行せざるを得ざるべし。

上皇にして尙武將を下馬せしむるの力を有せらるゝ以上、將軍に遣へば匍匐せざるを得ざるべ

しとの意。京童の口に皇室の式微を語られたるもの。

■ 命あり天に在り、何ぞ虞るゝに足らん。

足利 尊氏

弟直義、尊氏との不和の爲めに北國に走り將士多く之に従ひ京都殆ど空虚となる。尊氏の子義
詮大に悞れて警戒を加へんことを説けるに對して答へたる言葉。萬事天命なるに依り虞るゝに
足らずとの意。

■ 人生五十愧、無功。花木春過夏已中。

細川 頼之

滿室蒼蠅掃難去。起尋禪榻臥清風。

多年の勳功をも顧みられずして義滿の爲め貶黜せられたる時の詩。花木云々は頼之の己にその
全盛期を過ぎ世の中に用少きものになれるを言へるもの、蒼蠅は彼を義滿に讒言せし佞臣を指
す。禪榻とは座禪する爲めの腰掛。

■ 短軀悔る勿れ、三國の主。

赤松 滿祐

將軍足利義教彼の矮身に戯れて三尺入道と呼べるに慨し、一夜宴に侍して辭舞し右の歌を誦ふ。

三國の主とは播磨外二國の國主なりしが故である。

■其言は則ち然り、而かも其人に非ず。

足利義政

言ふ所は可なるも而かも言ふべきの人にあらすとの意。八代の將軍たりし彼の稅政を極諫せし近江の土熊谷某を罵れる言葉。遂に熊谷の邑を奪つて之を逐ふた。

■細川は洲の股川と名のれかし、尾張そこなふ河とこそ聽け。

細川勝元の友誼に背きて畠山政長を助けざりしを唱へる落首。政長の嘗て尾張守たりしと、洲股川の尾張に累する多きとにより此歌あり。

■公、吾れを養つて子となさば、吾れ公を封するに大國を以てし、安富尊榮以て其身を終ふべし、如何。

豊臣秀吉

足利氏の姓を冒さんと欲して足利氏最後の將軍義昭に請ひし言葉。

■吾れ命窮すと雖も猶八幡公、等持公の苗胤なり。安逸を計つて祖先を汗あせす

は吾れ之を恥づ。

足利義昭

前項の秀吉の請に答へたる言葉。八幡公は義家。等持公は尊氏。苗胤は子孫。

■源氏は王土を攘むすみ以て王臣を擽ひく者なり、足利氏は王土を奪ひ以て王臣を役する者なり。

頼山陽

擽くは引き寄せること。役する驅使すること。足利氏の罪の頼朝以上なるを言へるもの。

■天下の事知るべきのみ。功名を成し富貴を取る今を措て將た何れの時にか之を求めん。關八州地勢高隆、士馬精強、此に據るを得ば以て天下を制すべきなり。

北條早雲

同志六人と共に故郷伊勢を發し、劔に仗て東行して以て霸業を關東の一角に樹立せんとせし時の言。

■我輩新九郎君の一國の主たるを願ふや久し。敢て力を致さらんや。

北條早雲の伊豆を取らんとして其部下に謀れる時、彼等の答へたる言葉。新九郎君は早雲のこと。
■人主、民を視ること猶子の如く、民の人主を視る猶父の如し、是れ古の道なり。吾れ羈旅の人を以て來つて是邦に司牧す。生れて君臣となる豈偶然ならんや、我れ民の富足を願ふのみ。

北條早雲

伊豆を討伐し得たる時國の父老豪傑を集めて之に語れる言葉。羈旅の人は旅人、早雲は伊勢より來れる人にして關東の生れにあらざるが故なり。司牧は民を牧するの意にて國政を司る人のこと。富足は富みて足るの意。

■公生るゝの歳、子に次る。子は鼠神たり、是れ公の兩上杉に克つの兆なり。早雲一夜、大杉二株の一鼠の爲めに噛み倒され、且鼠の化して虎となるを夢み、卜者をして之を占しめたるに、卜者右の言を以て笑ふ。

■吾れ聞く兩虎相闘へば一狗隙に乗ずと。我族兵を構ふる數世、而して早雲其後を窺ひ關東に荐食す。吾と公と即ち兩虎にあらずや。

使者をして上杉顯定に語らしめたる言葉。荐食は類りに蠶食を違ふするの意。山内、扇兩上杉家の内訌に依て早雲を強大ならしむるの愚を説けるもの。

上杉朝長

■吾れ上杉氏を滅ぼし關東八州を併せんと欲して未だ其志をなさず。子孫繼いで其事に任じ敢て或は懈ること勿れ。然かも彼れ大族たり輒に取るべからず曠日彌久以て其弊を俟て。

北條早雲

臨終の遺訓。曠日彌久は日を曠ふして久しきに彌ると訓む。弊は疲れやぶること。

■其下常に相恐れて曰く管領駕を命せば北條氏立ろに粉壘せんと。關東の將士我心の威徳に順服する一日にあらず、何ぞ必ずしも人の力を借ることをせん。

菅野信方

上杉憲政の宴遊を事とし且扇谷上杉家と争へるを憂ひ、忠臣長尾意玄之を諫め北條氏に備ふべ

きを説く。信方は佞臣なり。即ち同穴の貉たりし佞臣上原兵庫と共に意支の説を非として憲政に上書するに右の言を以てす。其下は北條氏の下民。駕を命ずるは出征を命ずること。人の力を借るとは扇谷上杉家と和するの必要なしとの意。

■北條の君に親しむは新にして上杉の君に仕ふるは舊し。舊を去つて新に就く、君何ぞ惑へるや。君にして苟くも大旆を進め以て軍陣に臨まば、必ずや河越を擧げん。

難波田某

上杉氏の軍の北條綱成を河越城に圍みし時、上杉氏の臣難波田の古河公方足利晴氏に説ける所。大旆は軍旗。擧げんは抜くを得べしとの意。

■吾れ聞く、戦ひの道、衆必ずしも勝たず寡必ずしも敗れず、要は人心の和否如何に在るのみ。古へは曰く、小敵に怯にして大敵に勇なれと。吾れ上杉氏と戦ひ寡を以て衆に當る何ぞ今日に始らんや。勝敗の決、此一擧に在

り。汝將士、心を一にして力を協せ、唯我が嚮ふ所、是れ視よ。

北條氏康

八千の軍勢を以て八萬の上杉軍と入間河畔に決戦せんとせる時の言。氏康奮戦殆ど敵軍を殲滅す。

■吾れ以て闇主の闇を照す。

本間某

上杉憲政の臣。彼れ幹肥魁偉、燈九個を竿にて累れて以て背旗となして戦に臨み此言をなせり。憲政の暗愚を照らすの意である。

■輝虎慄慄前無く、而かも智慮短促、久しきを持する能はず。且、威力を以て諸將を劫すと雖も諸將必ず服せざる者あらん。宜しく其變を俟つて之を討つべきなり。

北條氏康

輝虎は上杉謙信、謙信の十一萬騎を率ゐて北條氏を小田原城に圍みし時の言。慄慄前無しは向ふ見ずの暴勇。

■是れ我功にあらず。綱成等の忠勇の致す所のみ。

北條氏康

八千の兵を以て八萬の上杉軍を破れる入間河畔の大勝の戦略を武田信玄に問はれて斯く答ふ。
謙讓想ふべし。

■吾れ今にして北條氏の大國たるを知る。郎君は大國の公子、故に此言をなすのみ。

武田信玄

嘗て北條氏の世子氏政と上野を略し朽山に軍したる時、夢を馭して過ぐる臣あるを見氏政その何たるかを問ひ傍人の夢なりと答ふるを聽き何ぞ速かに炊いて信玄に饗せざると云ふ。信玄氏政の下情に通ぜざるを晒つて此言をなす。蓋し氏政は夢の何たるを知らざりしは勿論、之を炊く迄に色々の手数を要するを知らざりしなり。

■北條氏將に亡びんとす。吾れ三十年前に過ぎりて榜令を觀し時、令四五條のみ。今則ち三倍す。是を以て之を言ふのみ。

氏政の寢く政を失せし時、一僧小田原の城下を過ぎ榜令を觀て、北條氏將に亡びんとすと言ふ。北條氏の吏之を聽き僧を捕へて其理由を質せるに對し僧右の言を以て答ふ。蓋し徳薄く政治滯り法令のみ煩雜となるは是れ即ち國家衰滅の兆なりと言つたのである。

■此地、吾が高祖の由て起る所。吾れ命を受けて之を守る。一障壁を失ふも吾れの耻なり。

北條氏規

秀吉の小田原征伐の時、葦山城を守りし彼の語りし所。高祖とは早雲のこと。

■方今北條氏の勢ひ、魚の釜中に在つて烈火之を烹るが如し。盍ぞ今に及んで降を納れて以て先祀を存せざる。

豊臣秀吉

小田原征伐の時、之に降を勧めたる言葉。先祀は先祖の祭り。

■吾れ父祖の業を承けて八州に主たり。武を争ふて之を失ふも吾れ必ずしも憾みず。降を納れて生を計るは死すとも能はず。

北條氏政

降を勧めたる者に語れる言葉。

■ 秀吉口舌を以て八州を取らんとす。盍ぞ弓箭を以て取らざる。

北條氏政

頼りに其來朝を促されたる時の言。

■ 止めよ、吾れ既に之を得たり。

北條早雲

早雲嘗て儒生を召し黄石公の三略を講ぜしめし時、其始めに主將の法、務めて英雄の心を攪るに在り、と言へる一句あるを聽き此言をなせりと傳ふ。最う分つたからよせ、との意。

■ 吾が貌ち不動佛に類す。我れ死するの後、四隣襲入するも我像を見れば敢て無禮を加へざるべし。

武田信玄

自己の姿を鏡に寫して其不動尊に類するを見、畫家をして其像を描かしめ以て此言をなす。

■ 謙信の兵を用ふるの速かなるは之を天資に得たり。而かも老成の計なし。關東の將士必ずや堪ふる能はず。終に氏康に歸すべし。汝暫く之に待て。

武田信玄

謙信の十一萬騎を率ゐて小田原を圍みし時、小田原にして陥らば我も亦危きに依り氏康を助けて謙信を討つべしと言へる飯富兵部に答へたる言葉。

■ 臣嘗て啄木の蟲を啄するを見るに、蟲を前に出さんと欲せば先づ其後ろを啄す。

馬場信房

信玄の氏康と薩摩山に對陣し計を諸將に問ひし時、信房此言を以て信玄に答ふ。

■ 吾れ兵を東海に出し海に沿ふて西し、旗鼓を京師に樹つるを得ば死して憾みなし。

武田信玄

北條氏と和し信長を討つて京都に上らんとせし時の言。

■ 彼れ敢て寡兵を以て我に當る。信玄の兒たるに愧ぢず。

上杉謙信

謙信の萬騎を以て長沼を襲ひし時、信玄の子勝頼八百騎を以て之に駆け向ふ。謙信之を稱して

右の言をなす。

■ 吾れ死なば天下一謙信のあるのみ。汝援を請ひ國を以て之に託せよ。彼れ一度汝の託を受けなば、隣國と合して汝を侵すことなかるべし。

武田信玄

死に臨みて子勝頼を諭したる言葉。

■ 動かざること山の如く、侵掠すること火の如く、其静かなること林の如く、其疾きこと風の如し。

武田信玄

信玄の其旗に誌せし孫子の言。

■ 吾が好敵手を失ふ。天下復此の如きの英雄兒あらんや。

上杉謙信

信玄の死の傳へられたる時、謙信方に食す。箸を投じて此嘆聲を發し流涕之を久ふせりと傳ふ。

■ 今日の戦、老怯は必ず死し、公等の如きは遁走せんのみ。

馬場信房
長篠の戦に際し勝頼の嬖臣長坂調困、跡部勝資の爲めに献策を斥けられ且老怯と罵られて此言をなせり。

■ 天下大に定まる。

織田信長

上杉謙信の死せる後、其後を定むることに關して、越後の大に亂れたるを聽き、手を打て大に喜び此言をなせりと傳ふ。

■ 先公威四隣に震ふ。故に城池を設けず。然かも今や自ら異なる。安んぞ備へざるべけんや。

穴山信良

先公は信玄のこと。勝頼に對して城を築くべきを勧めたる言葉。信玄は城を築かざりしなり。

■ 吾れ城を守るを知るのみ、他は之を知らず。

依田信蕃

勝頼の臣。徳川氏の降を勧めたるに對して答へたる言葉。

■ 吾れ國難に赴く。未だ家を謀るに暇あらず。

依田信蕃

家康の彼を壯として厚祿を以て招かんとしたるに對して答へたる言葉。

■ 吾が先公に報する正に今日に在り。汝何すれぞ敢て來つて我を誘ふ乎。

小山田昌辰

勝頼の臣、高遠城を固守せし時、織田信忠の使を送りて降を勧めたるに對し此言を以て答へ、使臣の耳鼻を截つて還せり。

■ 君嘗て我を擯く、而して吾れ君難に赴かば是れ君の明を傷くるものなり。

然かも赴かざれば我義を缺ぐ。我義を缺かんより寧ろ君の明を傷けんのみ。

小宮山友信

勝頼の臣。勝頼嘗て讒を信じて友信を斥く。而して勝頼の天目山に敗死せんとせし時、友信單騎來り從つて此言をなす。明は人を識別するの明。義は節義。

■ 大人宜しく奔るべきのみ。兒、冢嗣を辱ふす。義として此に死すべし。

武田信勝

勝頼の子。天目山に於て死せんとするに當り勝頼彼をして陸奥に奔らしめんとす。右は信勝の

此に答へし言葉。大人は父。冢嗣は跡取。

■ 妾何の顔あつてか阿兄に見えん。

勝頼の妻

夫人は北條氏政の妹。天目山に敗死せんとせし時、勝頼の之を相模に通れしめんとせるに對し此言を以て答へ與に死す。阿兄とは氏政を指せるもの。

■ 越後男兒武を用ふる此の如し。返つて筑前守に語れ、吾の越中に於ける、取らんと欲すれば則ち取る。而かも取らざるものは子に讓るなり。

上杉景勝

秀吉の佐々成政を越中に攻めんとせし時、使を遣して景勝の之を援くるなからんことを乞ふ。景勝其武を示さんと欲し越中の宮崎城を攻め一鼓之を抜きたる後、秀吉の使者に語るに右の言を以てす。筑前守は秀吉。子とは秀吉を指せるもの。

■ 彼れ身天下の權を掌る。而かも險を踰へて敵國に入れるは、前約を恃み、吾れの言を食まざるを信すればなり。之を殺すは不義なり。

上杉 景勝

秀吉、三成等三十餘騎を従へ自ら使者と稱して薄冰城に入り城將須賀に面して實を告げ景勝に面せんことを求む。須賀、景勝に説き執へて之を殺さんとせる時、景勝右の言を以て答へ、唯三成と直江山城の二人のみを侍座せしめて會見を遂ぐ。秀吉の膽識と景勝の信義と、之に配するに兩者の懷刀、三成と山城とを以てす。正に日本史上の一大偉觀なり。

■ 卿が國、歳入幾何。

豊臣 秀吉

景勝の越後を領せし時、歳入三百萬石に及ぶ。秀吉心に之を畏れ封を移さんと欲し逆問ふに右の言を以てす。景勝削減されんことを恐れ七八十萬石餘なりと答ふるや秀吉はその少きに驚ける所爲し之を會津に移して百二十萬石を食ましむ。

■ 先人の軍を用ふるは未だ嘗て人の危きに乗せず。吾れ敢て違はざるなり。

上杉 景勝

且、公年少我敵にあらず、吾れ内府の還るを俟つて決戦せんのみ。

家康の關原の戦ひに赴く時、長子結城秀康を宇都宮に留めて景勝に當らしむ。右は秀康の戦を請へるに對して答へたる所。先人は謙信。内府は家康。

■ 變を聞いて退くは怯なり。

直江 兼續

最上義光を山形に攻めし時、關原の敗報至る。兼續右の言を以て敵に告ぐるにその實を以てし翌朝、衆を鼓して其外城を陥れて歸れり。

■ 吾れの戰場に在る、教命ありと雖も一步も退く能はず。

上杉 景勝

大阪陣の時、家康、景勝の向ひし鷓野の難戦を聽き他をして之に代らしめんとす。景勝椅に憑つて動かす右の言を以て答ふ。

■ 景勝の武事、汝等敢て之を誹議するを得んや。

徳川 家康

大阪陣の時、軍監として景勝の陣に在りし家康の臣小栗又市の景勝の戦機を失せるを慨せるを聽き、家康の之を叱せし言。

■我れ數、毛利氏に叛して誅せられず、何ぞ今にして復た叛するを得んや。

山名 豊國

秀吉の鳥取城に豊國を圍み、其實を城外に縛して降を誘ひし時答へたる所。而かも秀吉の怒つて、其豊國の女を殺さんとするに至りて遂に降れり。

■大丈夫尸を原野に横ふべし。何ぞ遺狀を以てすることをせん。

小早川 隆景

隆景の花押の字劃繁雜なるを見、福島正則之を評して花押は簡單ならざれば臨終の遺言狀を認むる際に不便なるべしと言へるに對し、此言を以て答ふ。正則大に愧づ。

■家君一夜を以て陶氏に克ち、七年を以て尼子氏を滅す。蓋し小敵は緩やかに之を困しむべく大敵は急に之を挫くべきを以て也。吉川 元春

信長の自ら將として襲來せんとするを聽きて小早川隆景に語れる所。家君は父、元就を指す。

■火を縦ちて城を焚き更殿して退かば、何の虞れか之れあらん。

小早川 隆景

明と和して朝鮮の國都より撤退せんとするに當り敵兵の追躡せんことを恐れ如何にして之に處せんかに就きて諸將の議決せず。隆景の獨り柱に倚て眠れるを見、三成の之を喚起して計を問へるに對し右の言を以て答ふ。更殿は代るく殿軍となるの意。

■吁乎、美濃の一國、吾れ遂に之が贊幣となさざるを得ず。

齋藤 秀龍

信長の舅。彼と富田正徳寺に會して其の器量の卓絶せるを見て此言をなす。贊幣は引出物。

■人生五十年、夢幻の如し。生あれば茲に死あり、壯士將た何をか恨みん。

織田 信長

桶峽に今川義元を襲ひて乾坤一擲の壯舉を試みんとするに當り、酒を呼び自ら起つて舞ひ此歌を誦へり。

■好男子、攝津十三郡汝の取るに任す。

織田 信長

信長饅頭を刃の切端に貫き荒木村重に與ふ。村重口を開きて之を啗ふ。信長その膽勇を賞して此言をなせり。

■咄、田舎兒何をか知らん。

織田信長

武田勝頼を鷲巢山に攻めんとせし時、家康の臣酒井忠次夜襲を勧む。信長謀の洩れんことを恐れ伴り罵るに右の言を以てし、而かも潜かに忠次を招きて夜襲の計を問ひ即夜決行せしめて大勝を獲たり。

■此れ松永彈正なり。彼れ人の能くし難き者を爲すもの三。公方を弑するは一なり。三好氏に叛するは二なり。大佛殿を燔くは三なり。

織田信長

家康の嘗て信長の傍りに侍座せる一老人の何人なるやを問へるに對して答へたる所。

■師を出し三十日にして四國を定め其巨魁を獲、此兒眞に大奇なり。

織田信長

長子信忠の武田勝頼を滅せるを喜び此言をなす。信忠幼名奇妙故に大奇なりと言へるなり。

■汝が父、一生京師に入るを以て志となす。吾れ豎子をして其志を繼がしむ

るなり。

織田信長

武田勝頼の首を京都に擧して此言をなす。

■好禿願以て鼓に代ふべし。

織田信長

明智光秀の頭を撃ちて此言をなす。光秀大に怨む。

■本能寺湟の深さ幾尺ぞ。

明智光秀

信長に叛して之を本能寺に襲はんとせし時、連歌の席上菴を脱せずして粽を食ひ、卒然傍人に問ふに此語を以てす。

中川清秀

■筑前守の氣貌既に天下を呑む。

秀吉の光秀を山崎に破る時、清秀力戦最も勉む。織田信孝馬より下りて之を捕ふこと頗る鄭重なり。然かも秀吉は輿中より呼んで、清兵衛御苦勞と言つて過ぐ。清兵衛は清秀の俗稱なり。清秀依て右の言をなす。氣貌は氣勢。

■管領誠を推して我輩を遇す。我輩誓て相負かず。

信長の弑せられし時、澁川一益關東に管領たり。客將を招いて告ぐるに實を以てす。客將感奮右の言を以て酬ゆ。誠を推すは誠意を披瀝すること。

■臣の身を君に致すは大義なり。親の子に先つて死するは常道なり。汝三七君に仕へて其大義を行ひ、常道を履み、我の故を以て貳心を懷く勿れ。

織田信孝の乳母

秀吉の信孝を岐阜に攻めし時、其乳母を捕へ以て其子幸田某を招かんとす。乳母は此言を以て其子を勵まし幸田遂に秀吉の招きに應ぜず。秀吉怒つて乳母を磔殺す。三七君は信孝のこと。

■子秀吉と善し、我を以て爲すこと勿れ。

柴田勝家

秀吉に破れて北莊に歸らんとするに當り府中を過ぎて前田利家を訪ふ。利家彼が窮狀に心動き之を助けんとす。勝家即ち右の言を以て之を謝す。二人者の犠牲的友情の美しきを見る。後段は我を念とする勿れとの意。

■吾れ先君の恩を報ぜんと欲して遂に猴面藤吉の困しむる所となる。豈に天

にあらずや。

柴田勝家

北莊に於て自刃せんとする時の言。天は天命。猴面は猿面。藤吉は秀吉の前名。

■妾、去秋岐阜を出でしより業に已に身を良人に委ぬ。今日のこと固より心に期す、何ぞ必ずしも逃れん。

勝家の妻

信長の妹なり。勝家の之を逃れしめんとせるに對し泣て右の言をなす。夫婦訣飲曉に徹し終に刃に伏して駢死す。

■我れ修理の言を聽かざりしを悔ゆ、苟くも修理の言を聽かば即ち秀吉をして我の如くならしむべかりしなり。

佐久間盛政

秀吉の爲めに京都に斬られんとする時の言。修理は勝家を指す。

■吾れ命を受けて城を守るを知つて他を知らず、豈公等の人面獸行に倣はんや。

山口重政

秀吉の家康と小牧山に戦ひし時、家康方の將重政大野壘を守る。秀吉方の灌川一益重政の母を執へ降らざれば之を殺すべしと威嚇せる時重政右の言を以て答ふ。人面獸行とは信長の恩義を忘れ秀吉に與して信雄を討たんとせるを罵れるものなり。

■尾張知るべきのみ。

織田 信雄

三成の兵を擧げんとせる時、京都に退隱せる信雄を起たしめんと欲し戰勝たば尾張を與ふべきことを約す。而かも信雄の兵なきを以て之を辭するや金千枚を與ふべきを約し乍ら銀千枚を與ふ。信雄即ち右の言をなして三成に與せず。

■僧は乞丐のみ。大丈夫亂世に生れて安んぞ乞丐を學ぶことをせん。

日 吉 丸

委吉の幼時、光明寺に託せられたる時の言。

■吾れ此金を攘み以て仕進に資するも、他日志を得ば之を償ふこと易々たるのみ。

與 助

與助は秀吉の松下之綱の僕たりし時の名。胴圍一領を買はんが爲めに金六兩を託せられたる時此言を以て之を攘み衣服を整へて信長に仕へたり。仕進に資すとは大名に仕ふる衣服其他の資となすの意。

■汝の面猴に類す、其心必ずや敏捷ならん。

織田 信長

秀吉の路傍に跪きてその奴たらんことを求めたる時、その面を熟視して此言をなす。猴は猿なり。

■噫、危いかな。方今君の國、東に今川武田有り、西に齋藤淺井六角あり、日に我隙を窺ふ。然り而して備へを弛むること此の如し。有志君が爲めに謀つて忠ならず。

木下 藤吉

信長の居城清洲城の城壁修築の遲緩なるを見て此言をなす。信長秀吉をして之に當らしむるに二日にして工竣る。有志は官吏。

■子、諸を捨て、吾れ已に之と通ぜり。

木下 藤吉

前田利家、淺野長勝の養女を愛し之を娶らんとせりも、女之を肯ぜず。長勝の次に困窮せるを見、秀吉此言を以て利家を断念せしめ、後遂に自ら之を娶れり。通は密通の意。

■中國已に定まらば臣即ち直進して九州を下さん。九州下らば願くは其一歳の入を賜へ。然らば即ち糧仗を蓄へ舟艦を造り、海を濟りて朝鮮に入らん。君、臣が功を賞せんと欲せば願くは朝鮮を以て請ふことをせん。臣即ち朝鮮の兵を用ひ以て明に入らん。庶幾くば君の威靈を以て明國を席卷し三國を合して以て一となす。是れ臣の宿志なり。

豊臣 秀吉

中國征伐に上らんとして信長に壯語せし所。信長笑つて、秀吉復大言するかと言へりと傳ふ。

■今日始めて中國兒と戦ふ。濃尾の羞を貽す勿れ。

豊臣 秀吉

上月城を攻取せんとして浮田直家と戦ひし時、其部兵を激勵せし言葉。

■是れ大膽藤吉の獻する所乎。

織田 信長

秀吉の五歳にして中國五箇國を平げ安土城に信長に謁せる時、その之に獻せる所、寶刀一、鞍馬百、土物五千を算し、布施地を獻ふ。信長城樓より之を視、左右を顧みて欣然右の語をなす。

■汝の面目復昔日の藤吉にあらず、明日我れ將に客禮を以て汝を饗せんとす。

織田 信長

秀吉の中國五箇國を平げて安土に信長に謁せる時の言。前項参照。

■吾れの見る所、之に異なる。信長の死、天の我家に幸するにあらずして秀吉に幸するなり。何となれば應仁以來七道分離して騷亂相踵ぎ、今日に至つて極まる。天將に一豪傑を生み以て天下を掃蕩せんとす。吾れ秀吉の舉動を見るに是にあらざるを得んや。

小早川 隆景

信長の訃音の到れるに乗じて秀吉を討たんと言へるを非として此言をなす。掃蕩は拂ひ清めること、或は平定すること。

■吾が右府の恩を受くる、物比すべきなきは汝輩の知る所なり。今日死を致

して仇を復する者、吾に非ずして誰ぞ。天下の事此一舉に在り、汝等我が爲めに之を勉めよ。

豊臣秀吉

信長の計を聞き毛利氏と和して中國より返戦せんとするに際し其兵を激勵せる言葉。

■子、國家を定めんと欲せば即ち勝家を斬れ。

丹羽長秀

信長の死後、諸將清洲に會して後事を議せし時、柴田勝家謾言を以て秀吉に挑む。長秀、秀吉の耳に附して右の言をなす。秀吉晒ふて答へす。

■吾れ初め不逞の臣を誅して遺類なからしめんと欲す。吾れ聽く島津氏は源右大將の遠裔なりと。四百餘歳の名族、一日にして之を滅すは吾れ亦忍びず。

豊臣秀吉

島津征伐に際し、島津義久の降を許したる時の言。不逞の臣は來朝せざる臣。源右大將は頼朝のこと。

■氏政我を以て平維盛に比せんとするか。吾れ之に我技倆を示さんと欲す。

豊臣秀吉

北條氏政の秀吉の軍と比するに、源頼朝の討滅に向ひ乍ら富士河の水禽に驚きて潰走せし平維盛を以てせるを憤りて此言をなす。

■吾れ王命を受けて不逞を討つ。何物の龍王か敢て我を沮むを得んや。

豊臣秀吉

北條征伐の時、海の荒るゝを見、時人の龍王の崇なりと言へるを聞き此言をなせり。不逞は來朝せざる者。

■殿下の一言を得たるは百萬の封を得たるに勝る。

眞田昌幸

小田原征伐に際し秀吉家康以下の諸將と地圖を按じて戦を議す。家康と相好からざる昌幸、下坐に在りて地圖を見るを得ず。秀吉即ち昌幸を呼んで之を前め、我れ家康と共に東海道の先鋒たり、而して汝を以て中山道の先鋒となすと言ふ。昌幸感奮右の言をなす。

■關八州日ならずして取つて以て卿に與へん。卿も亦此に居らんとするか。

吾れ嘗て地圖を観るに是より東二十里許りにして地あり。江戸と言ふ。山海を襟帶し地濶く土肥えたり。卿宜しく此に居るべきなり。

豊臣 秀吉

小田原征伐の時、家康に語れる所。此に居るとは小田原に居らんとするかの意。

■ 臣、生死唯殿下の令する所、況んや邑土をや。

伊達 政宗

小田原に來りて秀吉に謁せる時の言。秀吉彼の叛反を恐れ悉其侵略せる所を還すべきを命ず。故に此言あり。

■ 吾れ寸兵を用ひずして五十四郡を取る。汝輩の知る所にあらず。

豊臣 秀吉

政宗を懐柔し得たるを言へるもの。秀吉の諸將政宗を國に歸すを非とし是れ恰も虎を野に放つが如しと言へるに對して此言をなす。

■ 關白は天威なり。

伊達 政宗

小田原に於て秀吉に面して歸れる後、傍人に語れる言葉。

■ 二人效なきにあらず。然かも降れば輒ち之を受くるは以て其勤勞を稱するに足らず。或は降し或は屠り、恩威並び行はれて始めて賞すべきのみ。

豊臣 秀吉

秀吉の小田原征伐に従ひし時、上杉景勝、前田利家降附五萬人を併せて來り會せるを見、此言をなす。

■ 汝敢て王命を輕蔑し我を笑侮す、今や即ち如何。

豊臣 秀吉

北條氏政の首級の致されたるを視て之を罵れる言葉。

■ 汝北條氏の舊將を以て首として我に降る。我の功臣は即ち北條氏の叛臣なり。吾れ私を以て釋す能はず。

豊臣 秀吉

大導寺政繁を罵れる言葉。遂に之を誅せり。首としては第一に立ちてと云ふ意。

■ 皆な非、蒲生氏郷にあらずんば可なる者なし。

豊臣 秀吉

東北鎮撫の一將を擇まんとして謀臣に其思ふ所を言はしむるに一人の氏郷を擧ぐる者なし。秀吉依て右の言をなせり。

■ 吾れ自ら誅戮を分とす。

伊達 政宗

氏郷、政宗の賊と通じて叛反を計れる手書を秀吉に献す、秀吉大に怒りて政宗を召す。政宗大坂に至り金粉を塗れる磔柱を作り人をして掲げて前行せしめ右の言をなす。秀吉その膽氣を愛して之を宥す。

■ 吾れ政宗の反計を知るも、願ふに彼の膽略愛すべし。故に釋して問はざるのみ。

豊臣 秀吉

説明は前項に在り。

■ 汝我友なり。徒手天下を取る、唯汝と我とあるのみ。然かも汝の名族に承籍せるは吾れの人奴より起れるに如かず。吾れ遂に地を略して明に至らんと欲す。汝以て如何となす。

豊臣 秀吉

鎌倉に遊びし時、頼朝の像を見、其首を撫して此言をなせり。徒手は素手。名族に承籍しは名門に生るゝこと。

■ 夫れ人の世に居る、古へより百歳に満たず、安んぞ能く鬱々として久しく此にあらんや。吾れ道を貴國に假り山海を超越して直ちに明に入り、其四百州をして我俗に化し以て王政を億萬斯年に施さんとす。是れ秀吉の宿志なり。

豊臣 秀吉

朝鮮征伐に先ち其國王李昭に送れる書状の一節。億萬斯年の斯は助辭にして意味なし。

■ 今日の議首鼠兩端を持するを得ず、和講するを欲せずんば乃ち戦はんのみ。

僧 玄 蘇

秀吉の書を齎らして韓に使せる時、韓の態度の明瞭ならざるを憤り聲を勵まして此言をなす。首鼠兩端は進退何れにも決せざるを言ふ。

■大丈夫武を萬里の外に用ふべし。何ぞ自ら悒鬱たることをせん。

豊臣秀吉

・秀吉淀君の生める鶴松の死せるを悲しみ快々として樂まざるもの幾月、一日清水寺の樓閣に登つて西方を望み、忽然として其の勇氣を復し從者を顧みて此言をなせり。悒鬱は意氣銷沈せること。

■我れ藥商より起る、當に藥囊を用ふべきのみ。

小西行長

朝鮮征伐に際し加藤清正、行長に對し何を以て其旗幟とすべきかを問ふ。行長答ふるに右の言を以てす。

■我れ此行彼をして我文を用ひしめんとするのみ。

豊臣秀吉

朝鮮征伐の時、秀吉の京都を發せんとせるに際し、何故に漢文を善くする者を從へざるかと言へる者に對し、秀吉笑つて右の言をなせり。

■豎子已に我に先んせるか、吾れ豈其迹を踐まんや。

加藤清正

清正、行長に後るゝ三日にして釜山に着し其の既に發せるを聽き此言をなせり。

■吾れ老ひたり、刀の重きを覺ゆ、以て卿を煩はさん。

豊臣秀吉

秀吉の伏見城に在りて大地震に遭へる時、徳川家康其從騎と共に秀吉を擁して行く。而かも秀吉の親兵の從ふものなし。家康の臣其袖を引いて之を殺さんことを勸む。秀吉談笑自如刀を家康に授けて右の言をなす。機略と明識と天縱に出づるを見るべし。

■我れ汝の爲めに勞費を惜まず、汝をして衆生を濟度せしめんと欲す。今汝己れの身をすら尙之を保つこと能はず、何ぞ吾に負くの甚しきや。

豊臣秀吉

大地震の時、其造營せる大佛の倒壞せるを見、罵るに此言を以てし弓を呼んで之を射る。

■我十萬の兵をして海外の鬼たらしむる勿れ。

豊臣秀吉

臨終に際し張目此言をなせりと傳ふ。

■天下洶々、吾れ嗣君の成立を見ずして死す、死すとも瞑せず。

臨終に際し奮呼此言をなせりと傳ふ。洵々は物情の定まらぬこと。嗣君は秀頼。太閤の倚託を受けたる秀頼の成長を見ずして死するは嘆する能はずとの意。

前田利家

■ 吾れ先君の知遇に報いんと欲し上杉毛利と共に事を擧げ一敗此に至る。命なり。願くば速かに自裁することを得ん。

石田三成

■ 關原敗戦後、田中吉政に捕へられたる時之に語れる言葉。自裁は自殺。
■ 子、吾が仇なりと雖も等しく豊臣氏の臣たり。吾れ其困に乗じて無禮を加ふるに忍びず。

淺野左京大夫

三成の捕へられたるを見、之と相善からざりし諸將類りに之を辱しむ。淺野左京大夫も亦三成の仇なりしと雖も彼の窮狀を見て辱しむるに忍びず自ら其羽織を脱して之に着せしめ右の言をなせり。家康之を聽き心に大夫を憚れりと傳ふ。

加藤清正

■ 吾れ今日聊か太閤の恩に報す。

秀頼を奉じて二條城に家康と相見え邸に歸れる後、短刀を懷より出し泣て此言をなせり。

後藤基次

■ 花房未だ死せざる乎。
大阪陣の時、基次伏を設け備前の國主池田忠繼を誘ふ。忠繼の將花房職之、基次の多謀を説きて進ましめざりし爲め伏兵空しく歸れり。基次因て右の言を爲す、所謂好漢好漢を知るもの。

■ 今日之事兩言にして決せんのみ。戦ふべきなり、守るべからざるなり。急に京師を襲ひ天子を挟み以て天下に令すべきのみ。

眞田幸村

大阪夏の陣の時進言せし所。戦ふ云々は進んで戦ふべく、留まつて二城を守るべきにあらずとの意。

■ 城中の近狀復た視るに足るべきなし、諸謀議皆母子に決し我輩の陳ぶる所一として聽かれず、天下永く家康の有する所となる知るべきのみ。

木村重成

戦死を決心し、義兄に其佩刀を贈りて訣別の意を表せるもの。母子は淀君と秀頼のことなり。

■今、東西勝を決す、西強く東弱からしめば即ち東に歸すべし。而かも今東強くして西弱し。弱を去つて強に就くは臣の耻づる所なり。雖然、東旨の辱亦報ぜざるべからず。報するに速死を以てせん、臣速かに死せば城も亦速かに陥らん。報する所以也。

後藤基次

大阪夏の陣の時、家康基次を誘ひ與ふるに播磨を以てせんとす。基次右の言を以て其知遇に答ふ。東旨の辱とは東軍即ち徳川氏の辱けなき提言。

■五畿七道四海の外、苟くも眼あるもの、觀て之を識らざるなし。之を敵人に委し傳觀播弄せしむるは羞を萬世に貽す所以、謹で奉還せんとするのみ。

津川左近

大阪城の陥りて秀頼以下皆自殺せんとせし時、左近其捕ふる所の千飄の馬標牙旗を秀頼に還し此言をなせり。傳觀播弄は寄り集まりて觀覽し弄り廻すこと。

■吾れ太閤の嫡子として此に至るは天なり。

豊臣秀頼

大阪城中に於て將に自刃せんとせし時の言。

■前將軍をして在らしむれば、吾れ一言せんと欲するも、今復何をか言はんや。

福島正則

家康死するの後、正則の封を奪ひ之を信濃に放つ、右は其の命を傳へ來れる徳川氏の使者に語れる所。

■吾れ足下と死を決せんと欲し、先づ女兒を殺さんとするも、終に刃を加ふるに忍びず。甘心命を受くべし。

福島正則

流瀆の命を傳へ來れる徳川氏の使臣に語れる言葉。甘心は甘んじての意。前項参照。

■願くは良人藁席瓦缸の時を忘るゝ勿れ。

北 廳

淺野氏の養女にして秀吉の室たりし人。秀吉の志を得たる後、常に之を戒めたる言葉。藁の上

に座し粗末なる缸の酒を汲んで結婚の式を擧げたる昔を忘るゝ勿れとの意なり。

■人生等しきのみ、或は君となり或は臣となる。分、隔つべく、情、隔つべからず。

徳川 清康

其臣下に對して常に語れる言葉。

■今日の酒、吾等が頸血なり。

清康群臣と一飲を共にするに當りて、禮に拘はらずして専ら情を推す。右は其臣下の感奮して相互に語れる言葉。

■衆おほき者は自ら其衆を恃み、寡すくき者は自ら其寡を知る。寡すくき者勝たん。

徳川 家康

十歳の頃安倍河原に童群の石合戦を見、其寡き者勝たんことを豫知し右の言をなす。

■所謂將門將を出すものか。

今川 義元

家康の今川氏に質たりし時、群童の石合戦を見、其寡なる者の勝つべきを豫言せるを聽き此言

をなせり。將門云々は將の家には大將たるべき人物を生ずとの意なり。前項参照。

■臣老ひたり、驅馳を效す能はず。特に郎君の爲めに倉廩を置いて糧食を蓄ふ、郎君之を以て多く士を養ひ以て武を四方に擧ぐべきなり。

鳥居 忠吉

家康の十六歳にしてその質となりし今川氏の許より國に歸れる時、忠吉家康の手を握り泣いて此言をなせり。驅馳は戰場に奮戦すること。倉廩は米倉。

■功狀は游士の以て口を藉る所なり。臣二君に仕へず、功狀を用ふることなし。

鳥居 元忠

家康の沓掛城を攻めし時、元忠の殊勳を嘉し感狀を與ふ。元忠右の言を以て之を辭す。游士云々は浪人の諸侯に仕を求むる時の材料となすの意。

■吾が幼時より舊臣多く鋒鏑に膏し、我れ常に心に之を傷めり。

徳川 家康

信長と和を講ぜんとせし時の言。鋒鏑に膏しは戦死すること。

■我君此に来る、汝等何ぞ無禮なるや。

本多平八郎

家康の初めて信長に面せんとして清洲城に入りし時、觀る者喧騰す。平八郎時に年十四、薙刀を擧げて先驅し右の言を以て之を叱し懼伏せしむ。

■吾れ植村新六なり。主人の刀を奉じて従ふ。何すれぞ叱するや。

植村新六

清洲城内に於て家康の信長と相見んとせし時、家康の臣新六刀を執て従ふ。信長の衛士之を叱せるに對し右の言を以て答ふ。

■孺子人に因て功を成すを欲せず。

本多平八郎

平八郎、叔父忠直と共に軍に従ひし時、忠直敵の一騎を斃し其首を平八郎に與へとらせるに對し平八郎右の言を以て之を謝し、自ら敵を斃して其首を擧ぐ。孺子は小兒。

■一步を進めば極樂に生れ、一步を卻かば地獄に墜ちん。

一向宗の僧侶の家康に叛きし時、其軍を激勵せし言葉。

■事已に此に至る、私親を恤ふる能はず。

内藤正成

一向宗の亂の時、其黨渡部高綱家康に逼る。高綱の甥正成之を見、右の言を以て射て高綱を斃せり。

■吾れ門徒の故を以て敢て主君に敵す。今其危きを見るに忍びず、吾れ寧ろ地獄に墜ちん。

土屋長吉

一向宗の亂の時、長吉家康に反せしも、亂戦の間に家康の危きを見、鋒を倒まにして家康の馬前に之を守りて死す。

■佛高力、鬼作左、彼此偏する無し天三郎。

家康の三河を定めし時、本多作左衛門、高力清長、天野三郎兵衛を以て奉行となす。高力は仁慈、作左衛門は剛直、而して天野三郎兵衛は公平無私、此を以て國人右の言をなし、其政治を謳歌せり。

■卿が膽、毛を生すと謂つべし。

織田信長

箕作城攻伐の時、家康の臣松平信一の勇戦を賞せる言葉。膽毛を生すとは大膽の義。

■吾にして此を去らば刀劔を蹋折して復用ひざるべし。信玄何ぞ畏るゝに足らんや。

徳川家康

信長、信玄を畏れ家康の之と交戦せるを聽き使者を派して濱松を撤去せんことを勸む。使者去るの後、家康近臣を顧みて右の言をなせり。蹋折はさし折ること。

■家康に過ぎたるものが二つあり。一に唐首、二に平八郎。

徳川家康

甲斐の國人の評せる所。唐首は牛の尾を胃の圍りに引きまはせるものにして家康の兵多く之を用ひたり。信長の贈る所なり。平八郎は本多平八郎。

■人我室に入つて我枕を蹴るも猶ほ臥して較せざる者あらんや。

三形原に於て信玄の四萬騎と戦はんとせる時、信玄の軍の甚だ鋭きを言つて之に戦ふことな

らんことを言へる諸將を叱咤せる言葉。較すは力を比ぶること。

■軍に輜重なく、竈に烟を見ず、是れ必ずや去らん。

富永某

家康の臣。家康の濱松城頭より信玄の軍を望みて其去留を問へるに對して答へたる言葉。

■臣敵の屍を檢するに北首する者は俯し南首する者は仰ぐ、以て家康の訓練を見るべし。

馬場信房

三形原の戦後其主信玄に語れる言葉。首を北にして死せる者は家康の在る方面に向へる者なるに依り俯向になりて死後も尙敬意を表し居るとの意なり。

■徳川氏何ぞ佳士多きや。

織田信長

武田勝頼と戦ひし時、家康の諸將の健闘せるを見て嘆稱せる所。

■豎子乃公をして枕を高うするを得ざらしむるもの數年、今果して何の状ぞや。

織田信長

武田勝頼の首級を見て此言をなす。

■公五州の主將を以て遂に此に至る。豈天にあらずや、
徳川家康
武田勝頼の首級の致されたる時、家康胡床を下り禮を加へて此言をなす。甲斐信濃の士民之を
聽いて寤に家康に心を寄せたりと傳ふ。

■吾れ後れたり。

豊臣秀吉

小牧山の戦ひの時、秀吉十三萬餘騎を従へて戰場に來着し地圖を按じて地形を察し、小牧山の
既に家康の據る所となれるを見て此言をなせり。

■此書をして十日前にあらしめば則ち秀吉を生致すべかりしなり。今や已に
徳川家康
後る。

小牧山の戦後、秀吉と和成りし後、十日餘にして土佐の長曾我部元親及び紀伊の高山貞政の書
至りて秀吉を夾撃せんことを報じ來る。家康長大息して右の言をなせり。

■義如何を問ふのみ。勝敗の數に至つては乃公自ら之を計る。

徳川家康

小牧山合戦に際し秀吉との和議に就て諸將の意見を徵せる時、石川數正秀吉と氣息を通じ利害
を説いて和議を力説す。家康叱して右の言をなせり。義は節義。

部之本日

■一搏撃すべきのみ、人の條制じょうせいに就く能はず。

徳川家康

秀吉家康の入觀を促すこと頗る急なりし時、秀吉の使者に對し其臂にせし鷹を顧みて語れる所。
搏撃は羽ばたき。條制は絲にてくくり付けらるゝこと。人の拘束を受くるを欲せずとの意を示
せるものなり。

■吾れ業に已に家康をして來らしむ。

豊臣秀吉

秀吉、家康の容易に入觀せざるに苦み、一夜沈思四更に至りて好案を得、急に部將を召して此
言をなせり。蓋し秀吉の意其異父妹の人に嫁せるを奪つて家康に嫁せしめ、尙入觀せざる時は
其母をして質たらしめんとするに在りしなり。

■新婦出あるも嗣たるべからず、我嗣子出で、質たるべからず、吾れ或は蚤

— 81 —

— 80 —

部之本日

世するも寸地をも割くべからず。

徳川家康

秀吉の召に應じて入観せんとするに當り其三條件として秀吉の使者淺野彈正に示せる所。彈正又秀吉の手書三條を出し見るに皆暗合せり。新婦云々は秀吉の妹を娶る後子生るとも跡取たるべからずとの意。蚤世は早く死去すること。

且彼れ亦天命あり、我當に之を助けて共に天下の亂を定めんとす。今復兵を構へんか亂曷ぞ止る所あらんや。我一人の命を捐て、億萬の生靈を救ふ亦多からずや。

徳川家康

秀吉の召に應じて入観せんとせる時の言。彼れとは秀吉を指す。

公第、義に違ふこと勿れ、義の在る所天下之に従ふ。徳川家康

入観して初めて秀吉に面せる時之に語れる言葉。公第は秀吉を指して言へるもの。

古へより誰か内調を以て事を敗らざる者あらん。今より以往、汝我が爲す

所に於て一の議する有るなく、外人の苞直に於て一も受くる有るなくんば則ち吾れ命を拜せん。

板倉勝重

家康の命を受けて奉行たらんとするに當り其妻に語れる言葉。妻之に従はんことを誓ひて後、彼を送りて出づ。而して其袴の勘めるを見て之を正さんとするや勝重其前言に違へるを叱す。妻惶恐之を謝す。勝重の治績大に擧る。内調は妻女に取入りて請託すること。苞直は賄賂。

咄、主公此大怪事を爲す。國に主たる者豈其城を空うして人に假す者あらんや。此の如くば即ち人或は其夫人を借らんと欲するも亦之を許すか。

本多重次

秀吉の小田原征伐の時、家康の海道の諸城を空うして之を迎へたるに慨し家康を罵れる言葉。重次は家康の臣。

否、首座、黥面の翁最も畏るべし。

豊臣秀吉

秀吉一日諸侯を會し秀頼を抱いて出で其何れが最も恐ろしきやを問ふ。毛利輝元容貌尤も魁偉

なりしに依り秀頼之を指して最も畏るべしと言へるに對し、秀吉右の言をなす。黧面は黒面、家康を指せるものなり。

■某此に在り、殿下未だ此言を出すべからず。殿下獨り小牧山の事を記せずや。

徳川家康

前項の席上、秀吉の自ら海内第一の弓取りなりと言へるを駁せる言葉。

■否、否、太閤天下を有つと雖も、弓箭の道に至つては一步も之を譲らず。譴怒に觸ると雖も避けざる所なり。

徳川家康

秀吉、家康の前項の言を聽き怒りて内に入る。諸將大に驚き前言は戯に出でしなるべしと言ひて取做さんとせるに對し、家康之を遮つて右の言をなす。諸將家康の直言に服せりと傳ふ。

■公等家康を賣るか。家康公等の言を以て太閤に報じ、太閤喜んで即ち此饗を賜ふ。而かも公等猶此の如し。賣るにあらずして何ぞ。舉座皆我が仇敵、

我誓つて一人を許さず。

徳川家康

秀吉の病篤かりし時、諸公家康に依り秀吉に報するに、協心戮力秀頼を奉戴すべきことを以てす。秀吉喜んで之を饗するに及び諸將酒を被りて復忿諍す。家康大に怒り右の言を以て之を叱咤し屏息せしむ。舉座は満座の者の意。

■子、獨り夫の奕棋する者を見ずや。中手相對すれば算成る者勝つ。即ち國手に遭へば其爲す所皆我意表に出づ。内府は國棋なり、吾れ其の子の意表に出づるなきやを恐る。

大谷吉隆

石田三成の家康を討たんとする作戦を聽きて此語をなす。中手は中位の棋打。國手及國棋は國中としての棋打。内府は家康。

■景勝の如き者之を用ふれば足る。

徳川家康

家康の景勝を討たんとして小山に赴ける時、軍麾を忘れたるを知り、道傍の竹を切り之に紙を束れたるを以て之に代へ右の言をなせりと傳ふ。

■西方塞がらば則ち我れ撃て之を開かん。

徳川家康

石田三成の軍の東上するを聞き軍を返して之に赴かんとする時、石川家成、星家の言を聞き今年西方塞れるを以て方を避けて發せんとを勸む。家康答ふるに右の言を以てす。

支那之部

■立ニ我悉民。莫レ匪ニ爾極。不レ識不レ知順ニ帝之則。

童 謠

訓我が悉民を立て、爾が極に匪^ちずと言ふことなし。識らず知らず帝の則に順ふ。

意 堯、天下の治まれるや否やを知らんと欲して町に出でたるに町の小兒等の右の唄を謡へるを聞き人民の悦服せるを知れりと傳ふ。其意、我等民衆(悉民)の生計を立つるを得るは汝堯の至極の徳に因れり。此故に我等は不識不知の間に、堯帝の法則に従ふと言へるものなり。

■日出而作。日入而息。鑿^レ井而飲。畊^レ田而食。帝力何有ニ於我ニ哉。

訓日出で、作し、日入りて息ひ、井を鑿りて飲み、田を畊して食ふ。帝力何ぞ我に有んや。

意 堯、天下の治まれるや否やを見んとして市上を巡視せし時一老翁の食事をなしつつ、腹鼓を打ち土地を叩き乍ら歌へる唄。其意は日の登ると共に仕事にかゝり、日入れば休息し、井戸を掘りて水を飲み、田を耕して食ふ。此の如く我等は自己の力を以て生活をなしつつある以上、帝の力の如き我等に何の關する所あらんやと言へるものにして、帝の力云々の如き彼等が如何に太平を楽しみつゝありしかを語れるものなり。

■ 壽則多辱。

堯

訓 壽シウれば則ち辱め多し。

意 人の彼が長壽を祈らんと言へるに對して答へたる言葉。長命なれば耻多しとの意。

■ 堯舜之人以堯舜之心爲心。寡人爲君。百姓各自以其心爲心。寡人痛之。

禹

訓 堯舜の人は堯舜の心を以て心と爲す。寡人、君となつて百姓各自其心

を以て心となす。寡人之を痛む。

意 堯舜の時代の國民は堯舜の如き立派なる心を以て自己の心となしたるも、予の國君となりてより百姓は各自の卑しき心を以て自己の心となせるが爲めに罪人多し。予甚だ之を悲しむとの意。寡人とは人君自らを稱する謙辭にして徳少き人の義。

■ 後世必有以酒亡國者。

禹

訓 後世必ずや酒を以て國を亡す者あらん。

意 儀狄の初めて酒を作れる時。禹之を飲んで甘しとなし此言をなせり。儀狄之に因て禹に疏んぜらる。

■ 吾受命於天。竭力而勞萬民。生寄也死歸也。

禹

訓 吾れ命を天に受け、力を竭して萬民を勞ふ。生は寄なり、死は歸なり。

意 予は天命を受け力の限りを竭して國民を勞れり。人生のこと、生は即ち此世に於ける寄留にして死は即ち故郷に歸るが如きものなり。禹の江を渡れる時、黃龍禹の舟を覆さんとす。禹

獨り神色自若天を仰いで此言をなせり。

■欲_レ左左。欲_レ右右。不_レ用_レ命者入_三吾網_一。

湯

訓左せんと欲する者は左せよ。右せんと欲する者は右せよ。命を用ひざる者は吾が網に入れ。

意 左に行かん_と欲する者は宜しく左に行くべし、右せんとするものは右に行け。唯だ予の命を聽かざるもののみ吾網にかかれ。湯網を四方に張り一切の禽獸を捕へんとせる者あるを見て其殘酷なるを責め、其三方の網を解きて唯一面のみを残して此言をなせり。諸侯聽いて湯の仁心を歎し仰いで天子となす。

■政不_レ節歟。民失_レ職歟。宮室崇歟。女謁盛歟。苞直行歟。讒夫昌歟。

湯

訓政節_{あらざるか}、民、職を失へるか、宮室崇きか、女謁盛るか。苞直行はるか。讒夫昌_{よかん}なるか。

意 政治節度に合せざるか、國民職なくして路頭に迷へるか、宮殿の美に過ぐるか、内謁盛んなるか、賄賂行はるゝこと多きか、讒姦の徒時を得たるか。早魃に際し桑林の野に雨を禱りし時、自ら責めし言葉、言未だ終らざるに雨降ること數千里なりしと傳ふ。

■彼爲_三象箸_一。必不_三盛以_二土簋_一。將_レ爲_三玉杯_一。玉杯象箸。必不_下葵_三藜藿_一衣_二短褐_一而舍_中芴茨_下。則錦衣九重。高臺廣室。稱_レ此以求。天下不_レ足矣。

箕

子

訓彼れ象箸を爲る。必ずや盛るに土簋を以てせず將に玉杯を爲らんとす。

玉杯も象箸なれば必ずや藜藿を羹にして短褐を衣、芴茨の下に舍らす。

則ち錦衣九重、高臺廣室、此に稱ふて求めば、天下も足らず。

意 彼れ既に象牙の箸を造る以上必ずや食物を盛るに土製の器(土簋)を以てせず玉製の器を造るならん。又玉杯象箸を造る以上野菜(藜)又は豆の葉(藿)を煮て食らひ、短かき毛織の着物(短褐)を着、かやいばら(芴茨)にて葺ける家の内には住まはざるべく、錦衣を着て奥深き宮殿に住

み、一切のもの此れに相當するものを求むるとせんか、天下の富を以てするも尙足らざるべし。
玉杯は玉にて造れる羹を入れる具、殷紂王の象箸を造れる時、其叔父箕子の慨嘆せる言葉。

■吾聞。聖人之心有_二七竅_一。

殷 紂 王

■吾れ聞く。聖人の心に七竅有り」と。

意 比干の諫言を憤り、此言を以て彼の胸を割き其心臓を見る。竅はあな。

■非_レ龍。非_レ鼪。非_レ熊。非_レ貔。非_レ虎。非_レ豹。所_レ獲霸王之輔。

■龍にあらず、鼪にあらず、熊にあらず、貔にあらず、虎にあらず、豹に
あらず。獲る所は霸王の輔ならん。

意 周の文王の狩に出でんとせる時、其獲物を卜して右の卦を得。果して太公望を発見し載せて
歸れり。鼪は龍の角あるもの。貔は豹に似たる猛獸。霸王の輔は霸道を行ふべき王者を輔弼
する者。

■父死不_レ葬。爰及_二干戈_一。可_レ謂_レ孝乎。以_レ臣弑_レ君。不_レ謂_レ仁乎。

伯 夷 叔 齊

■父死して葬らず、爰に干戈に及ぶ、孝なりと謂ふべきか。臣を以て君を
弑す、仁なりと謂ふべきか。

意 周の武王父文王の死後、幾くもなくして殷の紂王を討たんとせし時、兄弟の馬を控へて之を
諫めたる言葉。干戈に及ぶは戦ひを起すこと。

■登_二彼西山_一兮。采_二其薇_一矣。以_レ暴易_レ暴兮。不_レ知_二其非_一矣。神農虞夏忽
焉沒兮。我安適歸乎。于嗟徂兮。命之衰矣。

伯 夷 叔 齊

■彼の西山に登つて其薇を采る。暴を以て暴に易ふ、其非を知らず。神農
虞夏忽焉として没し、我れ安にか適歸せん。于嗟徂かん、命の衰へたる
かな。

意 彼の首陽山(西山)に登りて其薇を采つて生命を維ぐ。暴臣武王は暴君紂王を伐つて之に代
れるも自己の行爲の非なるを知らず。神農氏(炎帝)、有虞氏(舜)、夏(禹)の如き聖人の禪讓の
正道は忽焉として消滅し終る。我れ安くにか適從せん。あゝ唯死あるのみ。我が運命の衰へたる
かな。武王の殷王紂を討滅して周の天下となれる後、伯夷叔齊の兄弟は大に憤慨して周の粟を食
す。稱して首陽山に登り右の歌を作り遂に餓死せり。適は行く。歸は歸服。徂くは死すること。

■女忘_ニ會稽之耻_一邪。

越王 勾 踐

訓女、會稽の耻を忘れたるか。

意 吳王夫差の爲めに夫椒に破られ次で會稽山に於て辱めを受けたるを忘れたる乎との意なり。
勾踐の吳王に復讐せんとして膽を座臥に懸け仰いで之を嘗めて以て自ら勵ませる言葉。

■必樹_ニ吾墓_一。檜可_レ材也。抉_ニ吾目_一懸_ニ東門_一。以觀_ニ越兵之滅_レ吳。

伍 子 胥

訓必ず吾墓に檜を植ふるよ。檜は材たるべきなり。吾目を抉つて東門に懸け

よ。以て越兵の吳を滅すを觀ん。

意 吾墓に檜なる樹を植ふる。檜は以て吳王の棺を送るべき材料とならん。吾目を抉り取つて
城の東門に懸けよ。然らば越兵の吳を滅すを見るを得ん。子胥は吳王夫差の臣にして王を援け
て越王を破れる者。右は吳王の讒言を信じて彼に死を賜へる時の言。

■越王爲_レ人。長頸烏喙。可_ニ與共_ニ患難_一。不_レ可_ニ與共_ニ安樂_一。

范 蠡

訓越王の人となり長頸にして烏喙、與に患難を共にすべくして、與に安樂
を共にすべからず。

意 越王勾踐の人相は頸長くして口は烏の如くに突り、患難は共にすべきも安樂を共にすべき
の人相にあらず。王を援けて吳を滅ぼせる後、此言を以て去れり。

■居_レ家致_ニ千金_一。居_レ官致_ニ卿相_一。此布衣之極也。久受_ニ尊名_一不祥。

鴟夷子皮(范蠡)

則家に居ては千金を致し、官に居ては卿相を致す。此れ布衣の極なり。久しく尊名を受くるは不祥なり。

意 范蠡越を去り姓名を鴟夷子皮と變じて齊に行き鉅萬の富を積む。齊人彼が賢を聽いて宰相となす。范蠡右の言を以て宰相の位を辭して陶に去れり。布位は無位無官の卑しき者。

■有_二文事_一者必有_二武備_一。請具_二左右司馬_一以從。

孔子

訓文事ある者は必ず武備あり。請ふ左右の司馬を具して以て從はん。

意 文事を知る者は又必ず武備を忘れず、願くは左司馬、右司馬の武官を引き具して御供を仕りたし。魯の定公に従つて齊の景公と夾谷に會見せんとするに際し定公に具申せし言葉。此會合は修交を名としたるも景公の意は定公を處にせんとするに在りしを以て孔子豫め之に備へんとせるなり。

■良賈深藏若_レ虚。君子盛徳容貌若_レ愚。

老子

訓良賈は深く藏して虚きが如く、君子は盛徳あつて容貌愚なるが如し。

意 良き商店は其商品を深く貯藏せるが故に外見上は空虚にして何等の商品を存せざるが如くに看取せられ、有道の君子は盛んなる徳ありても之を衒はざるが故に容貌は一見愚なるが如し。孔子の禮を以て彼に向へるに對して答へたる言葉。

■鳥吾知_二其能飛_一。魚吾知_二其能游_一。獸吾知_二其能走_一。走者可_二以爲_レ網_一。游者可_二以爲_レ綸_一。飛者可_二以爲_レ矰_一。至_二於龍_一吾不_レ能_レ知_一。其乘_二風雲_一而上_レ天也。今見_二老子_一。其猶_レ龍乎。

孔子

訓鳥は吾れ其能く飛ぶを知り、魚は吾れ其能く遊ぶを知り、獸は吾れ其能く走るを知る。走る者は以て網を爲すべく、遊ぶ者は以て綸を爲すべく、飛ぶ者は以て矰を爲すべし。龍に至つては吾れ知ること能はず。其れ風雲に乗じて而して天に上る。今老子を見るに猶龍の如きか。

意 鳥とは飛ぶものなること、魚は遊ぎ獸は走るものなるは吾れ之を知る。走る者は網を以て、
遊ぐ者は綸を以て、飛ぶ者は罾を以て之を捕ふべきも、彼の龍に至つては吾れその何たるを知
らす。龍は風雲に乗じて天に昇る、今老子を見るに彼は猶龍の如き人物なるか。

孔子の老子に面して前項の言を聽ける後、歸りて其弟子に語れる所。罾はイグルミと訓み矢の
先きに絲を附し射て之を捕ふるものなり。此話は莊子の天運篇に表はれ居る所なるも事實なら
ざるべしと稱せらる。

■ 聖人用_レ人猶_二匠之用_レ木。取_二其所_レ長。弃_二其所_レ短。故杞梓連抱而有_二數尺
之朽。良工不_レ弃。

子思

訓 聖人の人を用ふること猶は匠の木を用ふるが如し。其長き所を取つて其
短き所を弃つ。故に杞梓連抱、而して數尺の朽あるも良工は弃てず。

意 聖人の人を用ふるは猶大工の木を用ふるが如し。其善き所を取つて其惡き所を棄つ。故に
杞梓(共に木の名)の如き良材にして一抱(連抱)の大きさを有するものは、内に僅か數尺の朽

れたる所ありとて良き大工は之を棄てず。

子思は孔子の孫。衛の國王に對して苟變コウヘンなる一將を推舉して此言をなす。

■ 具曰_二予聖。誰知_二鳥之雌雄。

詩經

訓 具に予を聖なりと曰ふ。誰か鳥の雌雄を知らん。

意 各人皆自己を以て聖人なりと言はば、其善惡の識別し難きこと、猶鳥の雌雄の相類似し居
りて識別し難きが如くならん。詩經小雅正日篇に見ゆ。

■ 生_レ我者父母。知_レ我者鮑子也。

管仲

訓 我を生む者は父母、我を知る者は鮑子なり。

意 管仲嘗て其友鮑叔と共に商賈を試み自ら利益を多く取るも鮑叔彼の食を知るを以て貪慾な
りとせず、又管仲の事を謀りて困窮せらるも鮑叔管仲を以て愚なりとせず、又管仲の三戰して三走
せるも其母あるが故なるを知つて之を怯なりとせず。管仲、鮑叔の知己に感じ右の言をなせり。

■ 晏子身相_二齊國。名顯_二諸侯。觀_二其志。嘗有_二以自下。子爲_二人僕御。自以爲_レ

足。妾是以求去也。

晏子御者妻

則晏子身齊國に相として名諸侯に顯はる。其志を觀るに嘗て以て自ら下ることあり。子人の僕御となり自ら以て足れりと爲す。妾是を以て去らんことを求む。

意 晏子は齊國の宰相として名は諸侯に顯はれ乍ら、常に人に下ることを志せり。御身は僅に人の御者たる身分にてあり乍ら自得の風あり。此理由に依て妾は離縁を求む。

晏子の御者の妻、其夫の宰相の御者なりとの意を以て揚々として自得の風あるを慨し離縁を求めたる言葉。

■寡人寶與王異。吾臣有檀子者。使守南城。楚不敢爲寇泗上。十二諸侯皆來朝。有盼子者。使守高唐。趙人不_三敢東漁_三於河。有黔夫者。使守徐州。則燕人祭北門。趙人祭西門。有種首者。使備盜賊。道不_レ拾_レ遺。

部之郡吏

遺。此四臣者將_レ照_三千里_一。豈特十二乗哉。

齊威王

則寡人の寶は王と異る。吾が臣に檀子と言ふ者あり、南城に守たらしむれば楚敢て寇を泗上になさず、十二諸侯皆來朝す。盼子と言ふ者あり、高唐に守たらしむれば趙人敢て東し河に漁せず。黔夫と言ふ者あり、徐州に守たらしむれば則ち燕人北門に祭り、趙人西門に祭る。種首と言ふ者あり、盜賊に備へしむれば道に遺を拾はず。此四臣は將に千里を照さんとす。豈特に十二乗のみならんや。

部之郡吏

意 子の寶は王と異る。子の臣に檀子なる者あり此者をして南城を守らしむれば楚恐れて泗水の邊に來寇し得ず、十二諸侯も皆來朝す。又盼子なる者をして高唐を守らしむれば趙人は恐れて東の方河水に漁をなし得ず。更に黔夫をして徐州を守らしむれば燕人は北門に、趙人は西門に祭をなして我の侵入するなからんことを祈る。更に又種首をして盜賊の警備に任せしむれば

— 101 —

— 100 —

國民恐れて遺失物を拾ふて盗む者もなし。此四人は千里の遠きを照すべき寶にして、音に車十
二乗を照す珠の如きにあらず。

魏惠王の車の前後十二乗を照す珠を有するを誇れるに對して報いたる言葉。

■千羊之皮不_レ如_二一狐之腋_一。諸大夫朝。徒聞_二唯々_一。不_レ聞_二周舍之鄂々_一也。

簡子

■千羊の皮は一狐の腋に如かず。諸大夫の朝する、徒らに唯々を聞いて、
周舍の鄂々を聞かず。

意 羊千匹の皮は一匹の狐の腋の下にある白毛に及ばず、今諸大夫の朝に臨むあるも徒らに唯々諾々たるのみにして周舍の如き堂々と直言して、議論を聞はすものなし。趙の簡子の家臣周舍の死を悼める言葉。唯々ははいく／＼と答ふること。鄂々は誇々にして堂々と議論を聞はすことなり。

■范中行氏衆人遇_レ我。我故衆人報_レ之。知伯國士遇_レ我。我故國士報_レ之。

豫讓

■范中行氏は衆人を以て我を遇す我れ故に衆人を以て之に報ず。知伯は
國士を以て我を遇す、我れ故に國士を以て之に報ず。

意 襄子に亡ぼされたる知伯の臣豫讓、知伯の仇を報ぜんとして執へらる。襄子之を詰り、汝は其前主たりし范氏及中行氏の仇を報することなくして、何故に單に知伯にのみ厚く報ぜんとするかを問ふ。讓即ち右の言を以て答ふ。范中行氏は范氏と中行氏共に豫讓の舊主にして知伯の爲めに亡ぼされたるも豫讓之が爲めに仇を報ぜざりしなり。

■五步之内、臣得_下以_二頸血_一濺_中大王_上。

藺相如

■五步の内、臣、頸血を以て大王に濺ぐを得ん。

意 相距る五步、直ちに王を殺すを得べし。藺相如は趙の惠文王の臣。王に侍して王と渾池に會せし時、秦王趙王に請ひて之に瑟を鼓せしめ乍ら、自らは相如の請ひを斥けて缶(瓦器)を撃たす。相如怒つて右の言を以て秦王を威嚇し遂に缶を撃たしむ缶は撃つて樂を奏するもの。

■豈獨畏廉將軍哉。顧念。強秦不敢加兵於趙者。徒以吾兩人在也。今兩虎共鬪。其勢不俱生。吾所以爲此者。先國家之急。而後私讎也。

關相如

■豈獨り廉將軍を畏れんや。顧念するに、強秦の敢て兵を趙に加へざるは徒、吾が兩人の在るを以てなり。今兩虎共に鬪はば其勢ひ共に生きず。吾が此を爲す所以は國家の急を先にして私讎を後にすればなり。

意 廉頗將軍、相如の榮達を妬みて之を辱めんとするや相如自ら避けて争はず。右は其家臣の之を耻とせるに對して論せる言葉。將軍之を聽きて大に耻ぢ肉袒、荊を負ひて門に詣つて謝し遂に刎頸の交を結べり。

■士處世若錐處囊中其末立見。今先生處門下三年。未_レ有_レ聞。

平原君

■士の世に處する錐の囊中に處るが如し。其末立_カにあらはる。今先生門下

に處る三年、未だ聞くことあらず。

意 趙の公子平原君楚に赴きて合従の議を定めんとし從士二十人を選みて其十九人を得、殘りの一人を求む。右は毛遂の自ら薦めて其員に加はらんことを求めたるに對して答へたる言葉。

■使_レ遂得_レ處_レ囊中乃穎脫而出。非_レ特末見而已。

毛遂

■使遂をして囊中に處るを得せしめば乃ち穎脱して出でん。特に末の見る、のみにあらざるなり。

意 平原君の前項の言に對して毛遂の答へたる言葉。予をして囊中にあらしめんか、必ずや全身を表はすべく、單に末端を見すが如きものにあらすとの意。

■公等碌々。所謂因人成事者也。

毛遂

■公等碌々たり、所謂人に因て事をなすものなり。

毛遂の自薦して楚に赴き以て合従の策を定めんとするや、平原君の他の從士之を目笑す。然

かも途の楚に至るや大功を樹て、以て彼等を驚かせり。右は功成るの後、前の冷笑に對して他の從士に報いたる言葉。前二項參照。

■貧賤者驕人耳。富貴者安敢驕人。國君而驕人失其國。大夫而驕人失其家。夫士貧賤者。言不用行不合。則納履而去耳。安往不得貧賤哉。

田子方

■貧賤なる者人に驕る耳。富貴なる者、安んぞ敢て人に驕らんや。國君にして人に驕らば其國を失ひ、大夫にして人に驕らば其家を失ふ。夫れ士の貧賤なる者は言用ひられず行合はされば則ち履を納めて去るのみ。安くに行いてか貧賤を得ざらんや。

■ 子方は魏の文侯の師、嘗て途に文侯の子、擊と遭ひて之に禮を返さず。擊怒つて「富貴なる者人に驕るか、貧賤なる者人に驕るか」と言へるに對して右の言を以て答ふ。履を納むは草履を足に著けての意。

■家貧思良妻。國亂思良相。

李克

■ 家貧うしては良妻を思ひ、國亂れては良相を思ふ。

■ 其相は善良なる宰相。李克の魏の文侯に説ける言葉。

■ 居視其所親。富視其所與。達視其所舉。窮視其所不爲。貧視其所不取。五者足以定之。

李克

■ 居居ては其親しむ所を視、富んでは其與ふる所を視、達しては其舉ぐる所を視、窮しては其爲さざる所を視、貧うしては其取らざる所を視る。五の者以て之を定むるに足れり。

■ 意 居常其の親交ある所を視、富んで後は其施與する所の如何を視、榮達して後は其の舉用する所を視、窮して爲さざる所、貧して取らぬ所、此の五つの名に依つて之を定むるに足る。魏の文侯の宰相選抜の方法を問へるに對して答へたる言葉。

■ 在_レ德不_レ在_レ險。若不_レ修_レ德。舟中人皆敵國也。

吳 起

訓德に在つて險にあらず。若し德を修めずんば舟中の人皆敵國なり。

意 恃む所は德にして險にあらず。若し德なくんば今舟を同ふせる臣下も皆敵とならん。魏の武侯嘗て舟を西河に浮べ中流に於て吳起を顧み、美なるかな山河の固め、魏の資なりと言へるに對し吳起右の言を以て答ふ。

■ 有_レ鳥在_レ阜。三年不_レ蜚_レ不_レ鳴。是何鳥也。

伍 舉

訓鳥あり阜に在り。三年蜚ず鳴かず。是れ何の鳥ぞや。

意 一鳥阜に在りて飛はず鳴かざること三年是れ果して何の鳥ぞ。楚の莊王位に即いて三年政を顧みずして只管りに樂みに耽る。右は伍舉が諷諫せるもの。

■ 三年不_レ飛。飛將_レ衝_レ天。三年不_レ鳴。鳴將_レ驚_レ人。

楚 莊 王

訓三年飛ばず、飛べば將に天を衝かんとす。三年鳴かず、鳴けば將に人を

驚かさんとす。

意 三年の蟄伏は要するに天を衝いて飛び、人を驚かす底の鳴聲を發せんが爲めのみ。伍舉の諷言に答へたる言葉。前項参照。

■ 古之君。有_レ以_レ三千金_二使_下涓人_一求_中千里馬_上者_甲。買_三死馬骨五百金_二而返_一。君

怒。涓人曰。死馬且買之。況生者乎。馬今至矣。不_三期年_二千里馬至者_三。

今王必欲_レ致_レ士。先從_レ隗始。況賢_三於隗_一者。豈遠_三千里_二哉。

郭 隗

訓古への君、千金を以て涓人をして千里の馬を求めしむる者あり。死馬の骨を五百金に買ふて返る。君怒る。涓人の曰く、死馬すら且之を買ふ、況んや生ける者をや、馬今に至らんと。期年ならずして千里の馬至るもの三つと言ふ。今、王必ず士を致さんと欲せば先づ隗より始めよ。况や

隗より賢なる者、豈に千里を遠しとせんや。

意 燕の昭王の士を致すの法を問へるに對して郭隗の答へたる言葉。涓人は洒掃を掌りて王に親近する人。

■民不_レ可_二與_レ虞_一始。而可_二與_レ樂_一成。

商 鞅

■民は與に始めを虞かるべからず、而かも與に成を樂しむべし。

意 人民は事の始めに當りて相談をかくべきものならざるも、其成果に就ては樂しみを同ふせざるべからず。秦王孝公に對して法律の變革を説ける時の言。

■泰山不_レ讓_二土壤_一。故大。河海不_レ擇_二細流_一。故深。

李 斯

■泰山は土壤を讓まず、故に大なり。河海は細流を擇まず、故に深し。

泰山は土の善惡を論せず悉之を集積せるが故に彼が如き大山となり、黄河や海は小川の善惡を選まざるが故に彼が如くに深し。秦の宗室大臣の相議して客賓を逐はんとせるを不可とし李斯の上書せる所の清濁併呑を説けるものなり。

■朕爲_二始皇帝_一。後世以計_レ數。二世三世至_二千萬世_一。傳_二之無窮_一。

秦 始 皇

■朕を始皇帝となし、後世以て數を計り、二世三世千萬世に至り、之を無窮に傳へん。

意 後世云々は朕以後は世數を以て計り數へんとの意。天下を統一せる時の豪語。

■嗟呼燕雀安知_二鴻鵠之志_一哉。

陳 勝

■嗟呼、燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや。

意 燕雀の如き小鳥は鴻鵠の如き大鳥の志を知り得んや。陳勝は率先して討秦の軍を起せる將軍。其初め貧しくして傭耕せる時、其一友を顧み後年富貴とならば汝を忘れざるべしと言へるに對し其友の之を冷笑せるに報いたる言葉。

■壯士不_レ死則已。死則舉_二大名_一。王侯將相寧有_レ種乎。

陳 勝 吳 廣

■ 壯士死せざれば則ち已む。死せば則ち大名を擧げん。王侯將相寧ぞ種あらんや。

意 男兒死せざる以上問題はなきも、死するに當りては天下を驚すが如き大なる名聲を博せざるべからず。國王と言ひ、諸侯と言ひ其他大將、宰相と言ふも何ぞ特別なる人種ならんや。兵を興して秦を討たんとせし際其部下を激勵せる言葉。

■ 書足_三以記_三姓名_二而已。劔一人敵也。不足_レ學。學_三萬人敵_一。

意 書は姓名を記するを得れば充分にして又劔は唯一人を敵とするのみなるに依り共に學ぶに足らず、願くば萬人を敵とするの術を學べん。羽の叔父項梁が羽の書と劔を學んで共にならざるを怒れるに對して答へたる言葉。項梁彼の意氣を壯なりとし之に兵法を教ふ。

訓書は以て姓名を記すに足るのみ。劔は一人の敵なり。學ぶに足らず。萬人の敵を學ばん。

■ 啖豎子。不足_レ謀。奪_三將軍天下_一者。必沛公也。

訓 啖豎子、謀るに足らず。將軍の天下を奪ふ者は必らず沛公ならん。

意 小僧の輩謀を共にするに足らず、將軍の天下を奪ふ者は必ずや沛公なるべし。鴻門の會に於て項羽の優柔にして沛公(漢の高祖)を撃つ能はざりしを憤りて之を罵れる言葉。豎子、將軍共に項羽を指す。

■ 富貴不_レ歸_三故郷_一。如_二衣_レ繡夜行_一耳。

訓 富貴にして故郷に歸らざるは、繡を衣て夜行くが如きのみ。

意 功成り富貴を致して後、故郷に歸らざるは繡を衣乍ら夜の闇を歩行するが如し。項羽の秦を破れる後、秦の地即ち關中に留まりて霸業を樹つべきことを説ける韓生に答へたる言葉。項羽は其故郷たる楚に歸らんとするの意頗る切なりしなり。

■ 人言楚人狝猴而冠。果然。

韓 生

調人は言ふ、楚人は狝猴にして冠すと。果して然り。

意 楚國の人は猿の冠を被れるが如しとは人の言ふ所なるが、予は項羽に依て其事實なるを知れり。項羽が自己の謀計を用ひざるを憤りて人に語れる言葉。羽聽いて大に怒り韓生を烹殺せり。前項参照。

■嗟乎。使_レ平得_レ宰_レ天下_一。亦如_レ此肉_一矣。

陳

平

調嗟乎、平をして天下に宰たることを得しめば、亦此肉の如くせん。

意 予をして天下の宰相たらしめんか、此肉の分配の宜しきを得たるが如くに天下の治平を致すべし。陳平は漢高祖の謀臣。其少年時代に村社に神を祭れる後、肉を分配する役即ち、庖宰となり、肉の分配甚だ宜しきを得て父老の稱讃を博せり。右の言は其時の述懐。

■力拔_レ山兮氣蓋_レ世。時不_レ利兮驩不_レ逝。驩不_レ逝兮可_レ奈何_一。虞兮虞兮奈_レ若何_一。

項

羽

調力は山を抜き氣は世を蓋ふ。時利あらず驩逝かず。驩の逝かざるを奈何すべき。虞や虞や汝を如何にせん。

意、我力山を抜くべく、我意氣は一世を蓋ふ。唯だ時非にして戦ひ敗れ、驩(愛馬の名)も平素の勇氣を失ひて前進せず。驩の進まざる、あゝ、之れを如何にせんや、虞よ、虞よ、我は汝を如何にすべきか。項羽の垓下に漢の高祖の軍に圍まれし時、夜四面の皆楚歌するを聽き、漢は既に我故郷の楚をも之を得たるかと感慨禁せず、寵姬虞美人をして起つて舞はしめ自ら此歌を謡へり。英雄の末路の悲壯なるを見よ。

■籍與_レ江東子弟八千人_一。渡_レ江而西_一。今無_レ一人還_一。縱江東父兄。憐而王_レ我。我何面目復見。獨不_レ愧_レ於心_一乎。

項

羽

調籍、江東の子弟八千人と江を渡りて西せり。今一人の還るものなし。縱は江東の父兄、憐んで我を王とするも、我れ何の面目あつて復見えん。

獨り心に愧ぢざらんや。

意 予は江東の子弟八千を率ゐて烏江を渡りて西の方秦を伐てり。而かも今一人の子に従つて生還せるものなし。よしや江東の父兄にして予を憐んで王とするとも、我れ何の顔あつて彼等に見え、心に耻づるなきを得んや。籍は項羽の名。

羽の垓下に破れて烏江を渡らんとせる時、烏江亭縣の長官、船を用意して彼を待受け江東に歸りて王たるべしと言へるに對し、右の言を以て答へ自願して死せり。

■夫運籌帷幄之中。決勝千里之外。吾不_レ如_二子房_一。填_二國家_一。撫_二百姓_一。給_二餽餉_一。不_レ絶_二糧道_一。吾不_レ如_二蕭何_一。連_二百萬之衆_一。戰必勝。攻必取。吾不_レ如_二韓信_一。此三人者皆人傑也。吾能用_レ之。此吾所以取_二天下_一。

漢 高 祖

■夫れ籌を帷幄の中に運らし、勝を千里の外に決するは、吾れ子房に如かず。國家を填め、百姓を撫し、餽餉を給し、糧道を絶たざるは吾れ蕭何に如かず。百萬の衆を運ね、戰へば必ず勝ち攻むれば必ず取るは、吾れ韓信に如かず。此三人者は皆人傑なり。吾れ能く之を用ふ。此れ吾が天下を取る所以なり。

意 籌を云々は、謀計を帷幄(幕のこと)中に立て、千里の遠きにある敵に對して必勝の神算を立てること。子房は張良の字。餽餉は兵糧。高祖の天下を平定せる後、一日宮殿に宴を張りて其天下を得たる所以を語れる得意の言。

■今以_二三寸舌_一。爲_二帝者師_一。封_二萬戶侯_一。是布衣極。願棄_二人間事_一。從_二赤松子_一遊耳。

張 良

■今三寸の舌を以て帝者の師となり萬戶侯に封せらる。是れ布衣の極、願くば人間の事を棄て、彼の赤松子に従つて遊ばん。

意 今、三寸の舌を以て帝王の師となりて大名に封ぜられたるも、永く尊貴に居るは明哲身を

保つ所以にあらざるが故に、人間界の事を棄て彼の赤松子に従ひ仙人の仲間とならん。赤松子は神農氏時代の仙人の名。張良の病に託して隱避せる時の言。

■ 孺子可教。

訓 孺子教ふべし。

意 此小僧以て教ふるに足る。張良の少時、下邳縣の土橋の上に於て一老人に遭ふ。老人其履を橋下に落し良に之を取來らんことを命ず。良怒つて之を毆たんとせりも其老を憐み忍びて之を取來る。老人良の善く事を忍ぶを喜び右の言をなし、後之に與ふるに太公望の兵書を以てせりと傳ふ。

■ 狡兔死走狗烹。飛鳥盡良弓藏。敵國破。謀臣亡。天下已定。臣固當烹。

韓 信

訓 狡兔死して走狗烹られ、飛鳥盡きて良弓藏れ、敵國破れて謀臣亡ぶと、天下已に定まる。臣固に當に烹らるべし。

意 黄石公の三略に言へることあり、狡兔死して後は獵犬は用なきものとして烹られ、鳥盡きて後には用なき弓は庫に納ひ込まれ、敵國の滅亡後には謀臣殺さる。今天下は已に漢のものとなれるに依り臣も烹られんとするものならん。高祖の爲めに縛せられて既に刑死されんとせし時の言。高祖之を赦して淮陰侯となせり。狡兔は走りて速かなる兔。

■ 陛下不能將兵。而善將將。此信所下以爲陛下禽也。且陛下所謂天授非人力也。

韓 信

訓 陛下は兵に將たる能はざるも、而かも善く將に將たり。此れ信が陛下の爲めに禽にせらるゝ所以。且つ陛下は所謂天授にして人力にあらざるなり。

意 漢高祖に答へたる言葉。禽にせらるゝとは韓信が嘗て高祖の爲に捕へられて殺されんとしたることあるが故なり。天授は帝王としての材を天に授けられたること。

■諸君知獵乎。逐殺獸者狗也。發縱指示者人也。諸君徒能得走獸耳。功狗也。至如蕭何。功人也。

漢高祖

訓諸君獵を知れりや。獸を逐殺する者は狗なり。發縱して指示する者は人也。諸君は徒らに能く走獸を得るのみにして功は狗なり。蕭何の如きに至つては功は人なり。

意 諸功臣を封するに當りて文官たりし蕭何の大封を得たるに對して不平滿々たりし武臣等に語れる言葉。發縱は綱を放すこと。

■秦失其鹿。天下共逐。高材疾足者先得之。當時臣獨知韓信。非知陛下。天下欲爲陛下所爲者甚衆。力不能耳。又不可蓋烹邪。

蒯徹

訓秦其鹿を失し、天下共に逐ふ。高材疾足の者先づ之を得。當時、臣獨り

韓信を知り、陛下を知るにあらず。天下陛下の爲す所を爲さんと欲する者甚だ衆きも力能はざりしのみ。又盡く烹るべからず。

意 秦帝位を失して天下の英雄皆之を得んとせらるも、就中才幹卓出し足疾き者第一に之を獲たり。當時臣は獨り韓信のみを知りて陛下を知らず。天下陛下と同じく帝位を狙へる者は甚だ多かりしも力足らずして目的を達せざりしのみ、若し此故を以て烹殺すとせば盡く其目的を達せんことは不可能なるに依り、獨り臣のみを烹殺さんとするは不當なるべし。蒯徹は韓信の臣、信に勸めて自立せしめんとせし廉を以て高祖に捕へられて烹られんとせる時、右の言を以て答ふ。高祖之を赦せり。鹿は帝位に譬へたるもの。

■陛下以馬上得之。寧可下以馬上治之乎。文武並用長久之術也。

陸賈

訓陛下馬上を以て之を得たるも、寧ぞ馬上を以て之を治むべけんや。文武並び用ふるは長久の術なり。

意 陸賈の漢高祖に詩書を講ぜんとせる時、高祖之を罵り、朕は馬上を以て天下を得たる者、詩書の如きは用なしと言へるに對して右の言をなせり。

■大風起兮雲飛揚。威加海内兮歸故郷。安得猛士守四方。

漢高祖

■大風起つて雲飛揚す。威海内に加はつて故郷に歸る。安にか猛士を得て四方を守らん。

意 秦天下を失へる後は恰も大風起り來つて矢の如き黒雲の徂徠するが如き形勢なりしも、朕之を平定し威は海内に普くして今故郷に錦を飾るに至る。今後願くば猛士を那邊に求めて四方を守らん。高祖の全く天下を平定せる後、故郷の沛に歸り故舊を招きて置酒高會し、陶然と醉をなして歌へる得意絶頂時の詩。項羽の垓下の詩と好對照をなすもの、共に氣格の雄大豪壯にして大英雄の面目の躍如たるを見る。

■盜宗廟器而族之。假令愚民取長陵一杯土何以加其法乎

■宗廟の器を盗んで之を族せば、假令、愚民あつて、長陵一杯の土を取らば何を以て其れに法を加へん。

張釋之

意 高祖廟の器を盗みたりとて之を族誅するとせば、若し愚民來りて高祖の陵たる長陵より一すくひの土を取らば、如何なる刑罰を以て之に加ふべきか。司法官たりし彼が盜者の一族を誅戮せんとせられたる漢の孝文皇帝を諫めたる言葉。

■治亂民一如治亂繩。不可急也。願無拘臣以文法。得便宜從事。

龔遂

■亂民を治むるは亂繩を治むるが如し、急にすべからず。願くば臣を拘するに文法を以てすることなかれ。便宜を得て事に從はん。

意 亂繩を治むるは亂れたる繩を解くこと。臣を拘するに云々は法律を以て臣を拘束するなく、

便宜事に處せしめよ。漢の孝宣帝に選まれて渤海郡の亂民を治めんとせる時、帝に語れる所。遂に其の言の如く治績を擧ぐるを得たり。

■賢而多財則損其志。愚而多財則益其過。且夫富者衆之怨也。吾不欲益其過而生怨。

疏廣。疏受

訓賢にして財多ければ則ち其志を損じ、愚にして財多ければ則ち其過ちを益す。且夫れ富は衆の怨む所なり。吾れ其過ちを益して怨を生ずることを欲せず。

意 廣は受の叔父。相共に其財産を費消して産を子孫に遺さざるの意を語れるもの。

■大丈夫當以下以馬革裹屍。安能死兒女手。

伏波將軍 馬援

訓大丈夫當に馬革を以て屍を裹べし。安ぞ能く兒女の手に死せんや。

意 男兒宜しく戰場に戦死し屍を馬の革を以て包ましむべし。兒女の看護を受けつゝ疊の上に死するは男兒のことにあらず。伏波將軍は雷の名。後漢光武帝の將軍にして、右は武臣の覺悟を語れるもの。

■嬰鑠哉是翁。

光武帝

訓嬰鑠たるかな、此翁や。

意 老いて益壯なるかな此老將軍よ。武陵の蠻民の反せる時、帝馬援の老齡なるを憐れむ。馬援甲を被つて馬に上り、鞍に據つて顧盼し猶ほ用ふべきを示す。帝之を親て右の言をなせり。項前参照。

■龍伯高敦厚周慎。謙約節儉。吾愛之重之。願汝曹效之。杜季良豪俠好義。吾愛之重之。不願汝曹效之也。效伯高不得。猶爲謹敕之士。所謂刻鵠不成。尙類鶩。效季良不得。陷爲天下輕薄子。所謂畫

虎不成。反類狗也。

伏波將軍 馬

援

龍伯高は敦厚周慎にして謙約節儉なり。吾れ之を愛して之を重んず。願くば汝が曹之に效へ。杜季良は豪俠にして義を好む。吾れ之を愛し之を重んず。汝が曹の之に效ふを願はざるは、伯高に效つて得ざるも猶謹敎の士とならん。所謂鶴を刻して成らざるも尙鶩に類するものなり。季良に效ふて得ざれば陥つて天下輕薄の子とならん。所謂虎を畫いて成らざれば反て狗に類するものなり。

意 龍伯高は人物敦厚にして慎み深く、謙遜にして節儉なり。予之を愛し又重んぜり。汝が願くば伯高に效ふべし。又、杜季良は豪俠にして義を好む。予之を愛し又重んずるも、而かも汝の之に效ふを願はざるは、伯高の人物を真似て其通りになるを得ざるも猶謹敎の人物となるを得ん。例へば鶴を刻して成功せざるも猶之に類似せる鶩(家鴨)に類似することを得るが如し。

而かも季良の豪俠を摸倣して成功せざる時は翻々たる輕薄才子となり、譬へば虎の繪を描いて成功せざる時は狗の如き形ちとなりて人に嘲笑せらるゝが如きものならん。汝曹は汝輩。鶴は一種の水鳥。馬援が其甥を訓戒せる言葉。前項參照。

■貧賤之交不可忘。糟糠之妻不下堂。

宋

弘

訓貧賤の交りは忘るべからず。糟糠の妻は堂より下ださず。

意 貧賤なりし時代の友人は忘れられぬ程に有難く、糟糠を食ふて艱難を共にせし妻は堂より下し得ざる程に情愛濃やかなるものなり。糟はかす。糠はぬか。共に貧民の食物なり。弘は後漢の光武帝の臣、帝の皇姉、湖陽公主、弘に戀せるに依り帝一日弘に向ひて妻を易ふるの意なきやを諷す。弘答ふるに右の言を以てせるに依り、帝は皇姉に事の成るべからざるを告げ、斷念せんことを勧めたり。

■生燕領虎頭。飛而食肉。萬里侯相也。

訓生は燕領にして虎頭、飛んで肉を食ふ。萬里侯の相なり。

意 君の領は燕の如くにして頭は虎の如し。燕の如くに飛んで虎の如くに肉を食ふ。萬里の外に大名となるの相なり。光武帝の時代に西域の都護となりし班超の少時、一親相家の彼を相せる言葉。

■君性嚴急。水清無大魚。宜蕩佚簡易。

班 超

訓 君が性嚴急なり。水清ければ大魚なし。宜しく蕩佚簡易なるべし。

意 超が其後任として西域の都護となりし任尙に對して、統治の方法を説ける言葉。蕩は宜大、使は緩和。

■天知。地知。子知。我知。何謂無知。

楊 震

訓 天知る、地知る、子知る、我れ知る。何ぞ知ることなしと言はんや。

意 子知るは汝ち知る。震の東萊郡の大守たりし時、下僚彼に賄し何人も知ることなきが故に受納されたと云ふ。即ち右の言を以て答ふ。

■常時身不離鞍。髀肉皆消。今不復騎。髀裏生肉。日月如流。老將至。功業不建。是以悲耳。

劉 備

訓 常時身鞍を離れず、髀肉皆消す。今復た騎らず、髀裏肉を生ず。日月流るゝが如し。老將に至らんとして功業建たず、是を以て悲しむのみ。

意 常に鞍に倚つて活動せし時は股の肉(髀肉)は皆消え失せぬたりしに拘はらず、頃日馬上に軍を指揮することなきが故に股に肥肉を生ぜり。歲月流るゝが如くにして老に至らんとするに拘はらず、功名は成らず、是れ予の悲しむ所以なり。劉備を德嘗て劉表と同席せし時、厠に行きて歸れる後ち、慨然として涙を流せり。右は表の之を怪んで其理由を質せるに答へたる言葉。

■儒生俗士。豈識時務。識時務者在乎俊傑。此間自有伏龍鳳雛。

司 馬 徽

訓 儒生俗士豈時務を識らんや。時務を識る者は俊傑に在り。此間自ら伏龍

と鳳雛と有り。

意 當世の爲すべき務めを知るは儒生俗士の能くする所にあらずして、唯獨り俊傑のみ之を知る。而して俊傑の間にも自ら蟄伏せる龍や鳳凰の雛の如き大英雄の存するなり。劉備の間に對して諸葛孔明を推薦せし言葉。

■孤之有孔明。猶魚之有水。

劉 備

劉孤の孔明有るは猶魚の水有るが如し。

意 劉備が孔明と意氣相投じて情好の密なるを言へるものなり。孤は國王自らを指せる謙辭。

■生子當如孫仲謀。向者劉景昇兒子豚犬耳。

曹 操

劉子を生まば當に孫仲謀が如くなるべし。向者、劉景昇が兒子は豚犬のみ。

意 子を生まば孫權の如き傑物を生むべし。向きに敗死せし劉表の子孫の如きは豚犬に等しき鈍物のみ。仲謀は孫權の字。景昇は劉表の字。孫權の爲めに赤壁に破らる、後ち彼の人物を嘆

稱せる言葉。曹操と劉備と孫權とは三國時代に天下を三分して保有せし國王にして曹操は魏の帝、劉備は蜀漢の帝、而して孫權は吳の帝王なり。

■蛟龍得雲雨。終非池中物。

周 瑜

劉蛟龍雲雨を得ば終に池中の物にあらず。

意 蛟龍にして一度雲雨を得ば直ちに昇天すべく、決して池中に留まることなかるべし。蜀の劉備が大に雄飛すべきを孫權に説ける言葉。蛟龍は龍の屬にして角なきもの。

■卿非復吳下阿蒙。

魯 肅

劉卿、復た吳下の阿蒙にあらず。

意 卿は曩日の愚物にあらずして非常なる進境を示せり。孫權の將呂蒙初め學なし。權之に勸めて書を讀ましむ。右の一句は魯肅が後年蒙と論議し其進境を嘆稱せる言葉。吳下は吳國。阿蒙の阿は親しみの言、蒙は呂蒙の蒙なり。

■士別三日。即當刮目相待。

呂蒙

訓士別れて三日ならば、即ち當に目を刮して相待つべし。

意 士別れて三日ならば目を拭ふて相待つべし。何となれば決して其舊觀を存するものにあらずればなりと大氣焰を擧げたるもの。前項參照。

■吳王任賢使能。志存經略。雖有餘閑博覽書史。不效書生尋章

摘句。

蒙 咨

訓吳王賢に任じ能を使ひ、志經略に存す。餘閑有つて書史を博覽すと雖も、書生の章を尋ね句を摘に效はず。

意 吳王孫權は賢者を任用し能才を使ひ、其志は四方を經略するに在り。故に餘閑ありて博く書史を讀むと雖も、唯大體に通するを目的とし、彼の書生輩の一句一章の尋求摘取に汲々たるが如き陋態なし。經略は天下を經理し他國を攻略すること。咨が魏國に使用して其國王に語れる

言葉。咨は孫權の臣。

■帶甲百萬。江漢爲池。何難之有。

超 咨

訓帶甲百萬、江漢を池となす、何の難か之れ有らん。

意 甲冑を帯びたる精兵百萬、江水漢水を城池となせる要害なり、何ぞ吳を畏るゝことあらんや。魏に使せる時、國王の吳は魏國を畏れ居るやと問へるに對して答へたる言葉。前項參照。

■聰明特達者八九十人。如臣之比。車載斗量。不可勝數。

超 咨

訓聰明特達の者八九十人、臣の比の如きは車に載せ斗を以て量るも勝て數ふべからず。

意 車に載せ云々は十人を一組として車に載せ五人を一柎に入れて勘定するも數へ切れぬ程に多數なり。特達は遙に人に卓出せる人物。咨の魏に使せる時、吳國には卿が如き傑物幾何なり

やと問はれたるに對して答へたる言葉。

■ 嗣子可^レ輔^レ輔^レ之。如其不可。君可^ニ自取^一。

劉 備

訓 嗣子輔^くべくんば之を輔^けよ。如其^しれ不可^らば、君自ら取^れ。

意 死に臨みて諸葛亮孔明に遺言せし所。朕の嗣子にして輔佐するの値あらば之を輔^け者し其値なくんば君自ら取^つて之に代^れ。

■ 死諸葛走^ニ生仲達^一。

訓 死せる諸葛、生ける仲達を走^らす。

意 死せる孔明は猶生ける司馬仲達を走らしむるの力あり。孔明の死せる時、仲達之を知りて漢の軍を追撃せんとす。而かも漢軍の軍容嚴にして侵すべからざりしを以て仲^達敢て之に加ふる能はず。右は仲達の怯を嘲れる百姓の言。

■ 何物老嫗生^ニ寧馨兒^一。然誤^ニ天下蒼生^一者。未^ニ必非^ニ此人^一也。

山 濤

訓 何者の老嫗か寧馨兒^を生む。然かも天下の蒼生を誤らん者は必ずや此人にあらずんばあらず。

意 如何なる老嫗が此才子を生めるか。然かも天下の人民を誤らん者は必ずや此人なるべし。老壯の學を喜んで之を鼓吹せし王衍の少時、山濤の之を相せる言葉。寧は此、馨兒は好香兒、才子と言ふの意。

■ 大禹聖人。乃惜^ニ寸陰^一。衆人當^レ惜^ニ分陰^一。

陶 侃

訓 大禹は聖人なり、乃ち寸陰を惜む。衆人は當に分陰を惜むべきなり。

意 禹は聖人にてあり乍ら而かも一寸の光陰を惜めり、況んや聖人ならぬ凡人に於ては尙一層時間を大切にせざるべからず。侃は東晉睿帝の名臣にして陶淵明の祖父。

■ 大丈夫行^レ事。當^ニ循々落落^一如^ニ日月皎然^一。終不^レ效^下曹孟德、司馬仲達等欺^ニ

人孤兒寡婦。狐媚以取天下也。

後趙 石 勒

訓大丈夫事を行ふ、當に礪々落落日月の皎然たるが如くなるべし。終に曹孟德、司馬仲達等が人の孤兒寡婦を欺き狐媚して以て天下を取るに效はず。

意 男兒の事を行ふ、宜しく磊落にして日月の明白なるが如くなるべし。彼の曹操が幼主後漢の獻帝を欺き、或は仲達が自己の主君たる魏の寡婦を欺き惑はして天下を奪へるに倣ふべからず。礪は磊に通ず、心明白にして小事に拘泥せざること。狐媚は狐の如く人を誑らかすこと。石勒は後趙を建設せる英雄。曹操は後漢の天下を奪ひて魏國を建て、司馬仲達は魏の天下を奪いて西晋の祖となれり。

■以吾之衆。投鞭於江。可斷其流。

秦王 堅

訓吾れの衆を以て鞭を江に投ずるも其流れを斷つべし。

意 我大軍を以てする以上、全軍兵の鞭を楊子江に投じても其流れを留め得べし。晋末十六國中の一たりし秦の國王堅が晋を攻めんとせし時、晋は楊子江を控へて要害の地なる故之を伐つ勿れと諫めたる者に對して豪語せし所。後果して晋の爲めに大破せられたり。

■長星勸汝一杯酒。世豈有萬年天子邪。

東晋 孝 武 帝

訓長星、汝に一杯の酒を勸む。世豈に萬年の天子あらんや。

意 妖星よ、汝に一杯を献ぜん、世豈に萬年に亙りて天子たり得るものあらん。帝酒を嗜み流連して政を顧みず、兵亂の凶兆なりとせらるゝ妖星の現はれたる時、之に向つて杯を舉げ右の言をなせり。

■我豈能爲五斗米。折腰向鄉里小兒。

陶 淵 明

訓我れ豈に五斗米の爲めに、腰を折つて郷里の小兒に向はんや。

意 我れ豈に五斗米の爲めに腰を屈して田舎の小僧輩に禮せんや。淵明の彭澤縣令たりし時、

巡察官の來臨に遭ひ束帶して之に禮せざるべからずと強ひられ右の言をなし即日官を辭して去れり。縣令の月俸は十五石、五斗は其一日の分に當る。

■ 畊當_レ問_レ奴。織當_レ問_レ婢。今欲_レ伐_レ國。奈何與_ニ白面書生_一謀_レ之。

沉慶之

訓畊は當に奴に問ふべく、織は當に婢に問ふべし。今國を伐たんと欲し、奈何ぞ白面の書生と之を謀らんや。

意 農畊のことは之を専門とする奴僕に問ふべく、機織のことは之を婢に問ふべし。今敵國を攻伐せんと欲し乍ら、何ぞ弱年の一書生王玄謨の如きと之を謀ることをせん。南朝の宋と北朝の魏と連年戦争を事とせし時、王玄謨、宋の文帝に勸めて大舉して魏を伐たしめんとす。右は沉慶之の之を諫めたる言葉。白面は顔色の生白き若者の意。

■ 使_下我治_ニ天下_一。十年_上。當_レ使_ニ黃金同_ニ土價_一。

齊太祖高皇帝

訓我をして天下を治むること十年ならしめば、當に黃金をして土の價と同

じからしむべし。

意 帝性清儉此言をなせり。

■ 此歩々生_ニ蓮花_一也。

潘妃

訓此れ歩々に蓮花を生ずるものなり。

意 此れ一步毎に蓮の花を生ずるものなり。潘妃は齊の廢帝寶卷の幸妃、黄金の蓮花を造り之を地上に貼布して此が上を歩ましめ右の言をなせり。歩々云々は報恩經に、極樂世界、蓮花歩々生の語あるに因る。

■ 吾常跨_レ鞍對_レ陣。矢石交_下。無_ニ怖心_一。今見_ニ蕭公_一。使_ニ人自慍_一。豈非_ニ天威難_レ犯_一。

侯景

訓吾れ常に鞍に跨つて陣に對し、矢石交、下れども怖るゝ心なし。今、蕭公を見るに人をして自ら慍れしむ。豈に天威犯し難きものにあらずや。

意 予は常に戰場を馳驅すと雖も少しも恐るゝ心なし。然るに今梁王に見ゆるに及んでは自ら恐怖心を生ぜり。是れ豈に天威の威容の犯し難きものなるにはあらずや。梁の高祖武帝に謁せる時の言。梁は姓蕭氏なるが故に蕭王と言ふ。

■我國家如_二金甌_一。無_二一傷缺_一。恐納_レ景因以生_レ事。 梁王 武帝

訓 我國家は金甌の如し。一も傷缺せる所なし。恐らくは景を納るれば因て以て事を生ぜん。

意 朕の國家は金甌無缺なるに、侯景の降附を納れんが、事を生ずるの恐れあり。甌は椀の小なるもの。侯景の降附を不可として此言をなせり。

■文武之道今夜盡矣。 梁 元 皇帝

訓 文武の道も今夜盡す。

意 文武の道も今夜滅盡す。西魏の爲めに攻破されたる時、古今の書十四萬卷を焚き此言をな

せり。

■讀_二書萬卷_一。猶有_二今日_一。 梁 元 皇帝

訓 書萬卷を讀むも猶今日あり。

意 讀書萬卷も國の急を救ふに足らざるを言へるもの、西魏に攻破されし時の言。前項參照。

■王氣在_レ此。彼何爲者。 陳王 叔 寶

訓 王氣此に在り、彼れ何んとするものぞ。

意 帝王の瑞氣は我上にあり、云々。隋の兵多きを聽きて之を侮蔑せる言。

■長江天塹。豈能飛渡。臣每患_二官卑_一。虜若渡_レ江。定作_二大尉公_一矣。 孔 範

訓 長江は天塹なり。豈に能く飛渡せんや。臣毎に官の卑しきを患ふ。虜若し江を渡らば定めて大尉公とならん。

意 楊子江は天威の壑壕なり、敵曷んぞ之を飛び越ゆることを得ん云々。大尉公は三公の一に居る大官。隋の強兵を聽きて陳王叔寶に語れる所。前項参照。

■世民觀天時人事。如_レ此。敢發_レ言。必執告。不_二敢辭_レ死

世 民 (唐太宗)

訓 世民天時人事を觀るに此の如し。敢て言を發す。必ず執へて告ぐとも敢て死を辭せず。

意 天の時、人民の事情を觀、當に謀反を企つべきものなりと思惟せるに因り之を口外せるのみ。執へて告發され、爲めに死するも敢て辭する所にあらず。唐太宗の父、高祖に對して隋の煬帝に叛すべきを勸めたる時。高祖大に驚き、汝何故に此の如き大膽の言をなすや、予は汝を執へて官に告發すべしと言へるを聽き世民右の言をなせり。世民は太宗の名。

■吾一夕思_レ汝言。亦大有_レ理。今日破_レ家亡_レ身亦由_レ汝。化_レ家爲_レ國亦由_レ汝矣。

唐 高 祖

訓 吾れ一夕、汝の言を思ふに亦大に理あり。今日家を破り身を亡_レふも亦汝に由らん。家を化して國となすも亦汝に由らん。

意 隋の天下に叛すべしと説ける汝の言も亦大に道理あり、事敗れて家を破り生命を失ふか、或は成功して家を化して國家となすか、皆汝に據て乾坤一擲を試むることにせん。于世民の叛を勸めたるに答へたる言葉。

■公若鼓行而西。撫而有_レ之。如_レ探_二囊中物_一耳。世 民 (唐太宗)

訓 公若し鼓行して西し、撫して之を有せば、囊中の物を探るが如きのみ。

意 父上にして事を舉げて西に向ひ、關中の豪傑を受撫して我物となし、以て天下を謀らば之を得るの易き恰も袋の中に物を探るが如きものなるべし。後に唐の高祖となりし文李淵に對して謀反を勸めたる言葉。

■龍鳳之姿。天日之表、其年幾_レ冠。必能濟_レ世安_レ民。

訓龍鳳の姿、天日の表、其年冠するに幾び必ず能く世を濟ひ、民を安んぜん。

意 姿は龍と鳳凰の如く、顔は太陽の如し。元服する年頃に至らば必ずや濟世安民の大業を樹てん。唐の太宗の少時一書生の之を相せる言葉。之に因て名を世民と定む。

■餘人不_レ足_レ惜。如晦王佐才。大王欲_レ經_二營四方_一。非_二如晦_一不可。

房 玄 齡

訓餘人は惜しむに足らず、如晦は王佐の才、大王四方を經營せんと欲せば、如晦にあらずんば不可なり。

意 王佐の才は國王を輔佐するに足る大才。玄齡が唐高祖に對して杜如晦を地方の官吏となして王の左右を去らしむるの不可を説けるもの。玄齡、相曹共に一代の名臣たりし人物なり。

■玄齡爲_二吾兒_一謀_レ事。雖_レ隔_二千里_一。如_二對_レ面語_一。

唐 高 祖

訓玄齡吾兒の爲めに事を謀る、千里を隔つと雖も、面に對して語るが如し。
意 高祖の時、世民出てて秦を鎮し事毎に玄齡をして父高祖に奏せしむ。高祖玄齡の陳述の明快にして千里の遠きに在る者の言を取次ぎて恰も面接して語るが如きの思ひあらしむを稱せるもの。

■吾自爲_レ詐。何以責_二臣下之直_一乎。朕方以_二至誠_一治_二天下_一。

唐 太 宗

訓吾れ自ら詐を爲さば、何を以てか臣下の直を責めんや。朕方に至誠を以て天下を治めん。

意 詐はいつはり。直を責むとは正直なれと責むること。詐つて怒りをなして以て臣の姦佞と剛直とを識別すべきことを勧めたる者の言を斥けたる言葉。

■君依_二於國_一。國依_二於民_一。刻_レ民以奉_レ君。猶_二割_レ肉以充_レ腹。腹飽而身斃。君富而國亡矣。

唐 太 宗

謂君は國に依り、國は民に依る。民を刻して以て君に奉ずるは、猶肉を割いて以て腹に充つるが如し。腹飽いて身斃れん、君富んで國亡びん。

意 君主の依て立つ所は國、而して國の根本は即ち民なり。故に國民の膏血を絞りにて君の用に充つるは自己の身體の肉を切りて空腹を充すに異らず。満腹する時は既に生命を失ひ、君獨り富んで國家は滅亡せん。

昔魯哀公謂孔子曰。人有好忘者。徒宅而忘其妻。孔子曰。又有甚者。桀紂乃忘其身。

魏 徵

謂昔、魯の哀公孔子に謂つて曰く、人好く忘るゝ者あり、宅を徒して其妻を忘ると。孔子の曰く、又甚しき者あり、桀紂は其身を忘ると。

意 人好く云々は、好く物忘れをする男ありて轉宅の時自己の妻を忘る。又云々は之以上に甚たしき者は彼の桀紂の如き暴君にして、彼等は自己自らのことを打忘れたり。唐の太宗に語れ

る言葉。

勿没々而聞。勿察々而明。雖冕旒蔽目。而視於無形。雖黹纒塞耳。而聽於無聲。

張 蘊 古

謂没々として聞ことなかれ、察々として明かなること勿れ。冕旒目を蔽ふと雖も而かも無形に視、黹纒耳を塞ぐと雖も、而かも無聲に聽く。

意 沈冥して暗愚なる勿れ、又小事に察にしてその明を誇る勿れ。冕に垂れたる布の目を蔽ふと雖も、心の眼を以て形なきに尙之を視、冕の房の耳を塞ぐとも尙其心の耳に依て聲なきに聽け。没々は聞き貌。黹纒は黄色の綿にて造れる房。右は蘊古が帝者の箴言として唐太宗皇帝に進言せる所なり。

願使臣爲良臣。勿使臣爲忠臣。

魏 徵

謂願くば臣をして良臣たらしめ、臣をして忠臣たらしむる勿れ。

意 其君と力を協せて治績を擧ぐるは即ち其臣にして、暴君を諫めて禍の身に及ぶを顧みざるものは是れ即ち忠臣なりとの意味を言へるもの、換言すれば暴君の下に忠臣あり、其君の下に其臣ありとの意を述べ、願くば陛下は其君として太平を致され、臣をして暴君の亂世に忠を致すべき忠臣たらしむる勿れと言へるものなり。唐太宗に語れる言。

■ 饑者易_レ爲_レ食。 渴者易_レ爲_レ飲。

魏

徵

訓 饑えたる者は食を爲し易く、渴せる者は飲をなし易し。

意 饑者、渴者は食と飲とを擇ぶこと少く、何にても取て食ひ取て飲む。唐太宗の大亂の後には治め難き乎と問へるに對し答へたるものにして、大亂の後には民の平和を望むこと急なるに依り治め易しと言へるものなり。

■ 卿未_ニ嘗_ニ進_ニ一賢才_一。 而專言_ニ銀利_一。 昔堯舜。 抵_ニ璧於山_一。 投_ニ珠於谷_一。 漢之桓靈。 乃聚_レ錢爲_ニ私藏_一。 卿欲_下以_ニ桓靈_一。 俟_レ我耶。

唐

太宗

訓 卿未だ嘗て一賢才をも進めずして専ら銀の利を言ふ。昔堯舜は璧を山に抵ち、珠を谷に投ず。漢の桓靈は錢を聚めて私藏となす。卿桓靈を以て我を俟たんと欲するか。

意 桓靈は東漢末葉の愚帝たりし桓帝と靈帝。權萬紀の唐太宗に對し宣州及饒州の銀を發掘すべきことを説けるを聽き帝喜ばずして右の言をなし、萬紀を黜けたり。

■ 以_レ銅爲_レ鏡。 可_レ正_ニ衣冠_一。 以_レ古爲_レ鏡。 可_レ見_ニ興替_一。 以_レ人爲_レ鏡。 可_レ知_ニ得失_一。 徵沒朕亡_ニ一鏡_一。

唐太宗

訓 銅を以て鏡となさば衣冠を正すべし。古を以て鏡となさば、興替を見るべし。人を以て鏡となさば得失を知るべし。徵沒して朕一鏡を亡_レなふ。

意 銅の鏡を以てすれば衣冠の歪めるを直し得べく往古のことを鏡とせば國家興亡の因果を見るべし、人を以て鏡となせば利害得失を知るべし。今、魏徵死して朕は人間の鏡を失へり。徵

の死せる時太宗の之を悼める言葉。

■魏徵若在。不_レ使_三我有_二此行_一也。

唐太宗

■訓魏徵若し在らば、我をして此行あらしめず。

意 此行とは高麗を親征せるを指す。而して事終に成らず、故に此言あり。

■人主惟一_二心_一。攻_レ之者衆。或以_三勇力_一。或以_三辯口_一。或以_三詔諛_一。或以_三姦詐_一。或以_三嗜欲_一。輻湊各求_三自售_一。人主小懈而受_三其一_一。則危亡隨_レ之。此其所_二以難_一也。

唐太宗

■訓人主は惟一_二心_一なるも之を攻むる者は衆_多し。或は勇力を以てし、或は辯口を以てし、或は詔諛_{てんゆ}を以てし、或は姦詐_{かんさ}を以てす。輻湊して各自ら售_うらんとを求む。人主少しく懈_{あや}つて其_一を受くれば則ち危亡之に隨はん。此

れ其の難き所以なり。

意 君主は唯一人なるも之を攻むる者は多し、勇力、辯舌、阿諛_{あご}、姦詐_{かんさ}を以て競ひ寄つて自ら售_うらんことを求む云々。

■草昧之初。羣雄竝起。角_レ力而後臣_レ之。創業難矣。

房玄齡

■訓草昧の初め。羣雄竝び起り、力を角して後之を臣とす。業を創むるは難し。

意 草は齊しからざること、昧は暗きこと即ち隋末の亂を指す。一日唐の太宗皇帝の創業と守成と熟れか難きかを問はれたるに對し玄齡の答へたる言葉。

■自_レ古帝王。莫_レ不_レ得_三之於艱難_一。失_中之於安逸_上。守_レ成難矣。

魏徵

■訓古へより帝王、之を艱難に得て之を安逸に失はざるはなし。成を守るは

難し。

意 唐の太宗の間に答へたる言葉。前項参照。

■玄齡與_レ吾共取_二天下_一。出_二百死_一得_二一生_一。故知_二創業之難_一。徵與_レ吾共安_二天下_一。常恐驕奢生_二於富貴_一。禍亂生_二於所_レ忽。故知_二守成之難_一。然創業之難往矣。守成之難。方與_二諸公_一慎_レ之。

唐 太宗

■玄齡は吾と共に天下を取り百死を出で、一生を得たり。故に業を創むるの難きを知る。徵は吾と共に天下を安んじ、常に恐る、驕奢の富貴に生じ、禍亂の忽にする所に生ずるを。故に成を守るの難きを知る。然れども創業の難は既に往きぬ。守成の難は吾れ諸公と之を慎しまん。

意 驕奢云々は驕奢は富貴の後に來り、禍亂は油斷の間に發生し來る。之を慎まんとは守成

の難は將來に在るを言へるものなり。自己の間に對する房玄齡と魏徵の答へを聽きて此言をなす、前二項参照。

■笑中有_レ刀。

■笑中、刀あり。

意 笑ひの内に刀を藏し、頗る陰險なること。唐の高宗帝の時、美府と言へる一人物の外面溫和にして内心の狡險なりしを言へる當時の世評。

■臣仰觀_二天象_一。俯察_二歷數_一。其人已在_二陛下宮中_一。不_レ過_二三十年_一。當_レ王_二天下_一。殺_二唐子孫_一殆盡。其兆已成矣。

李 淳 風

■臣仰いで天象を觀、俯して歷數を察するに、其人已に陛下の宮中に在り。三十年を過ぎずして當に天下に王たるべし。唐の子孫を殺して殆ど盡きん。其兆已に成れり。

意 唐太宗の太史李淳風に對して問を發せるに對し淳風の答へたる所。其意太宗の才人にして後に高宗の皇后となりし武氏が唐の天下を奪ふべきを預言せるものなり。既に宮中に在り、とは武氏の既に才人として太宗の宮中に在りしを言へるもの。

■一抔土未_レ乾。六尺孤安在。試觀今日之域中。竟是誰家之天下。

李敬業

■一抔_ほの土未だ乾かず。六尺の孤安にか在る。試に觀よ今日の域中を。竟に之れ誰が家の天下ぞや。

意 先帝高宗死して其陵の土未だ乾かざるに其皇后たりし武后は多く唐の宗室を殺し、先帝の後を紹ぎし其遺子は今安くにか在る。試みに見よ今日の中國の有様を。是に王たる者は李氏の唐にあらずして武氏たるにはあらずや。英公李敬業の武后を討する檄文。

■人言六郎似_二蓮花_一。吾謂蓮花似_二六郎_一耳。

■人言は言ふ六郎蓮花に似たりと、吾れ謂らく蓮花六郎に似たるのみと。

意 武后の寵臣張昌宗の容貌の美はしきを稱せる佞臣の評語。六郎とは昌宗がことなり。

■此所_三以爲_二吾憂_一也。人唾_二汝面_一。怒_レ汝也。而拭_レ之。則逆_二其意_一而重_二其怒_一矣。唾_レ不_レ拭自乾。當_二笑而受_レ之耳。

婁師德

■此れ吾が憂ひを爲す所以なり。人汝が面に唾するは汝を怒るなり。而して之を拭は、則ち其意に逆つて其怒を重ぬ。唾は拭かざるも自ら乾かん。當に笑て之を受くべきのみ。

意 師衛、其弟と共に武后に重用せられ、兄弟相並んで榮寵の人に過ぐるを恐る。弟、彼に語つて今後は自ら大に謙抑し人の吾面に唾するあるも黙して之を拭かんと言へるに對し、師德即ち右の言をなす。其意蓋し、駄して拭くのみにては未だ足らず、拭かば猶對手の怒りを増す所以なれば笑つて之を受け拭くことも尙且之をなす勿れ、と言へるものなり。

■太宗櫛_レ風沐_レ雨。親冒_二鋒鏑_一以定_二天下_一。傳_二之子孫_一。太帝以_二三子_一託_二陸

下。今乃欲移之他族。無乃非天意乎。姑姪與母子孰親。陛下立子。則千秋萬歲後。配食太廟。立姪。則未聞下姪爲天子而祔姑於廟者也。

狄仁傑

訓太宗風に櫛り雨に沐し、親ら鋒鏑を冒して以て天下を定め之を子孫に傳ふ。太帝二子を以て陛下に託す。今乃ち之を他族に移さんと欲す、乃ち天意に非ざるなからんや。姑姪と母子と孰れか親しき。陛下子を立てば則ち千秋萬歳の後ち、太廟に配食せん。姪を立てば則ち未だ姪、天子となつて姑を廟に祔する者あるを聞かず。

意 武后高宗の後の故を以て帝死する後唐の天下を奪ひ、之を自己の姪、武承嗣に傳へんとす。仁傑之を諫め右の言をなす。太宗皇帝世民は櫛風沐雨自ら戰場に馳驅して天下を定め之を子孫に傳ふ。太帝高宗は陛下との間に生れたる哲、且の二皇子を陛下に託して崩御されたるに今、

唐の天下を奪つて之を他族たる武氏に傳へんとするは天意に悖るなきを得んや。陛下若し皇子に位を譲らば崩御の後ち、宗廟に祭られんも姪の承嗣に譲らば之は不可能なるべし。

■明公之門珍味多矣。請備藥物之末。

元行冲

訓明公の門には珍味多し。請ふ藥物の末に備はらんと。

意 行冲は狄仁傑の愛せし博學の士、諫争する所多し。藥物の末云々は、面折延争、鯁骨の臣の一人たらんとの意。右は狄仁傑に語れる言。

■天下桃李悉在公門一矣。

訓天下の桃李悉公の門に在り。

意 桃李は天子が推薦せし所の臣。狄仁傑の武后に賢臣を薦むること多かりしを言へるものなり。

■薦賢爲國。非爲私也。

狄仁傑

訓賢を薦むるは國の爲めにして私の爲めにあらざるなり。

意 仁傑の賢者を天子に推薦することの多きを言へる者に對して彼の答へたる言葉。前項参照。

■吾雖瘠。天下肥矣。

唐 玄宗

訓吾瘠せたりと雖も、天下肥えたり。

意 韓休、玄宗の宰相なりし時、帝の過ちあれば假借する所なく之を諫争す。或人帝に對し、韓休の宰相たりし間に陛下は瘠せられたりと言へるに對し右の言をなす。

■此胡腹中何所_レ有

唐 玄宗

訓此胡の腹中、何の有る所ぞ。

意 安祿山の腹便々として垂る。帝一日之を指して右の言をなす。安祿山は營州の胡なり。故に此胡と言ふ。

■有_二赤心_一耳。

安 祿 山

訓赤心あるのみ。

意 赤誠の心あるのみ。玄宗帝の彼の便々たる腹を指し肚裡何をか藏すると言へるに對して答へたる言葉。前項参照。

■二十四郡。曾無_二一人義士_一邪。

唐 玄宗

訓二十四郡。曾て一人の義士なきか。

意 安祿山の叛せる時、河北道も亦之に與ると聽きて發せる嘆聲。河北道は二十四郡あり。故に此言あり。

■我爲_レ國討_レ賊。恨不_レ斬_レ汝。何謂_レ反也。臊羯狗。何不_二速殺_レ我。

顏 果 卿

訓我れ國の爲めに賊を討す。恨むらくは汝を斬らざるを。何ぞ反と謂ふや。臊羯狗、何ぞ速かに我を殺さるや。

意 祿山の反する時、常山の太守果卿之を討ちて敗れ祿山の前に致さる。祿山嘗て果卿を奏して太守たらしめし恩を言ひて其恩に負けるを責めたる時、果卿右の言を以て答ふ。祿山大に怒りて之を惨殺せり。臊羯狗とは腥き胡の狗にして祿山を指して罵れるもの。

■臣力竭矣。生既無_三以報_二陛下_一。死當_下爲_二厲鬼_一以殺_也賊。

張 巡

訓臣、力竭きたり。生きては既に以て陛下に報するなし。死せば當に厲鬼となつて以て賊を殺すべし。

意 安祿山の亂の時、祿山既に死せるもその子安慶緒猶ほ誅に服せず。右は張巡の賊將尹子奇の爲めに其據守せし雒陽を陥れられて之に死せる時の言。厲鬼とは歸する所なき精靈。

■怒者常情。笑者不可_レ測也。

魚 朝 恩

訓怒る者は常の情、笑ふ者は測るべからず。

意 怒る者は普通人の感情を有する者なるも、笑ふ者の心は測りしれず。朝恩は唐の代宗皇帝の時の宦官、嘗て人を譏りし時其一人は怒り一人は笑ふて平然たり。朝恩即ち右の言をなす。

■天乎。不_レ欲_三朕致_二太平_一。何奪_二朕楊綰_一之速也。

唐 代 宗 帝

訓天なるかな。朕の太平を致すを欲せず、何ぞ朕の楊綰を奪ふの速かなるや。

意 天乎は天命なるかな。名臣楊綰の死を悲しめる言葉。

■臣爲_二陛下_一擇_レ人。不_二敢不_レ慎。非_レ親非_レ故。何以_レ諳_二其才行_一而用_レ之。

崔 祐 甫

訓臣、陛下の爲めに人を選ぶ、敢て慎しませんばあらず。親にあらず故にあらずんば何を以て其才行を諳んじて之を用ひんや。
意 祐甫人望を收めんとして親戚故舊を官に任用すること多し。右は唐の徳宗皇帝の之を言へ

るに對して祐甫の答へたる言葉。

■此膝不_レ屈_二於人_一久矣。今爲_レ公拜。

田承嗣

■此膝人に屈せざるや久し。今公の爲めに拜す。

意 唐の徳宗の時に死せる一代の名臣郭子儀を頌せる言葉。

■去_二河北賊_一易。去_二朝廷朋黨_一難。

唐文宗皇帝

■河北の賊を去るは易く、朝廷の朋黨を去るは難し。

意 河北の賊は黄河の北に居る胡。朋黨の争ひは唐の滅亡の一原因をなせるもの、李牛の争ひに至りて其極に達せり。

■正人指_二邪人_一爲_レ邪。邪人亦指_二正人_一爲_レ邪。在_二人主_一辨_レ之。

李德裕

■正人は邪人を指して邪となし、邪人も亦正人を指して邪となす。人主の

之を辨するに在り。

意 正しき人物は邪_{（まじ）}なる人物を邪なりと言ふも、而かも邪なる人物も亦正しき人物を誤りて邪なりと言ふ。故に其眞偽を識別するは君主の務めなり。唐の武宗皇帝に上言せる言。徳裕は牛僧儒の政敵なりし人物なり。

■天子不可_レ令_レ閑。常宜_下以_二奢靡_一娛_レ之。使_レ無_レ暇_レ及_二他事_一。慎勿_レ使_二之_一讀_レ書親_二近儒生_一。見_二前代興亡_一。心知_二憂懼_一。則吾輩疎斥矣。

仇士良

■天子は閑ならしむべからず。常に宜しく奢靡を以て之を娛しましむべく、他事に及ぶの暇なからしめよ。慎んで之をして書を読み儒生を親近せしむる勿れ。前代の興亡を見て心に憂懼を知らば則ち吾輩疎斥せられん。

意 唐武宗帝の時の宦官士良の官を罷めて歸らんとするに當り、其黨の之を送る者に對して教

へたる言。天子を暗愚ならしめて自家の權勢を張るべきを言へるもの、宦官の弊の唐滅亡の一原因をなせる亦偶然ならざるを知るべし。

不_レ意頗_レ牧在_ニ我禁中_一。

唐宣宗皇帝

訓意はざりき、頗_レ牧我が禁中に在らんとは。

意 往昔の廉頗、李牧の如き大人傑の我宮中に存在せりとは全く意想外の所なり。學士學誠と邊疆の守備を論じて之を嘆稱せる言葉。

卿到_レ彼爲_レ政。朕皆知_レ之。勿_レ謂_レ遠。此階前則萬里也。

唐宣宗皇帝

訓 卿、彼に到つて政を爲す、朕皆之を知れり。遠しと言ふ勿れ。此階前は即ち萬里なり。

意 建州の刺史の辭職を申出でたる時、帝之に曰ふて建州の京師を去る幾何なりやと言ふ。答

へて八千里なりと言ふを聽き帝即ち右の言をなせり。階前萬里とは階段の前に於て萬里の遠きを知るの意。

吾聞遠詩云。長日惟消一局碁。安能理_レ人。

唐宣宗皇帝

訓 吾れ聞く遠が詩に云ふ、長日唯消す一局の碁と。安んぞ能く人を理めん。

意 李遠を杭州の刺史に推薦せる宰相に對して言へるもの。宰相之に答へ此れ詩人の高興を述べたるに過ぎずして事實上必ずしも然らずと言へり。

詔命既行。直廢格不_レ用。宰相可_レ謂_レ有_レ權。

唐宣宗皇帝

訓 詔命既に行はる。直ちに廢格して用ひず、宰相は權を有つと謂ふべし。

意 朕の命令は既に公布されあるに拘はらず、直ちに之を廢して用ひずとあらば、宰相の手に權力は存する者と言はざるべからず。宰相令狐綯の帝の命に反せるを叱咤せるもの、時恰も冬、綯の慚汗重裘に徹したりと傳ふ。

■吾十年兼政。最承恩殊。每延英奏事。未嘗不汗沾衣。

令狐綯

訓吾れ十年、政を兼り、最も恩殊を承く。延英にして事を奏する毎に、未だ嘗て汗、衣を沾はさずんばあらず。

意 延英は殿名。即ち延英殿に参候して事を奏する毎にと言ふの意。綯は唐の宣宗帝の宰相、

右は帝の威容山の如きを語れるものなり。

■全未。全未。尙畏之在。

唐宣宗皇帝

訓全く未し。全く未し。尙畏る之れ在らん。

意 帝一日密かに學士章澳を召し、宦官の權勢如何を問へる時、章澳之に對し陛下の威斷前古の比にあらずと答ふ。帝、眼を閉ぢ首を搖かして右の言をなす。蓋し章澳の面諛を諷せるもの乎。

■朱三汝作天子邪。汝從黃巢作賊。天子用汝爲四鎮節度使。何負於

汝。奈何滅唐家三百年社稷。自爲帝王。行當族滅矣。

朱全昱

訓朱三、汝天子となるか。汝黃巢に從つて賊をなす。天子汝を用ひて四鎮の節度使となす、何をか汝に負く。奈何ぞ唐家三百年の社稷を滅して自ら帝王となる。行く／＼當に族滅すべし。

意 朱家の第三位に在る全忠よ、汝は遂に天子となれるか。汝は嘗て黃巢に從つて盜賊をなしつゝありたるを、唐の天子は汝を四鎮の節度使に擧用され毫も汝に負かれたることなし。然るに何故なれば汝は唐三百年の國家を滅して自ら天子とはなりたるぞ。將來に於ては當に一族を擧げて誅戮に服することならん。後梁の太祖朱全忠の兄全昱が弟の唐の天下を奪へるを罵倒せる言葉。

■朱溫所憚先王耳。聞我新立。以爲童子。必有驕怠之心。若簡精兵。倍道趨之。出其不意。敢威定霸。在此一舉。

訓 朱温の憚る所は先王のみ。我が新に立つを聞き以て童子となし、必ずや驕怠の心あらん。若し精兵を簡^たび、道を倍して之に趨き其不意に出れば、威を取り覇を定むる此一舉にあらん。

意 存勗は後唐の主、晋王李克用の子。右は後梁王朱温の爲めに潞州に圍まれたる時の言。其意、朱温の憚る所は先王、李克用のみにして、克用死して我れ之を紹げりと聞き予を以て小兒なりとして驕怠の心あらん。若し精兵を選び道を迂回して彼の不意を襲はば、威を天下に立て以て覇を稱するも此一舉に依て決するを得べし。

■ 我經ニ營天下三十年。不^レ意大原遺孽。更昌熾如此。吾觀ニ其志ニ不^レ小。我死諸兒非ニ彼敵。吾無ニ葬地。

訓 我れ天下を經營する三十年。意はざりき、大原の遺孽^{ひつ}更に昌熾なる此の

如くならんとは。吾れ其志を観るに小ならず。我れ死なば諸兒彼が敵にあらず。吾れ葬地なけん。

意 朱温の病重かりし時、その初め大に蔑視したりし李克用の子存勗の次第に強大を致せるを見て此言をなす。大原の遺孽とは晋王李克用の遺子と言ふの意にして晋の都は大原なりしが故に此言をなせり。

■ 此子志氣遠大。必能成ニ吾事。

訓 此子志氣遠大なり。必ずや能く吾事をなさん。

意 子存勗の人物を稱せるもの、存勗後果して天下を定め國を唐(後唐)と稱せり。

■ 諸侯血戰。本爲ニ唐家。今王自取^レ之。誤ニ老奴ニ矣。

訓 諸侯の血戦は本と唐家の爲めにす。今、王自ら之を取る。老奴を誤る。

意 承業は唐の遺臣、唐の天下を復せんとして李存勗を助け、後遂に其志を達するや存勗自ら

帝を稱し唐の天下の復せられざりしを慨し右の言をなす。老奴を誤るとは予を欺けりとの意。

■理天下二只一人。尙誰呼邪。

敬新磨

■天下を理むるは只一人なり。尙誰をか呼ぶ。

意 天下は唯一人なり。然るに尙他を呼んで天下を争はしめんとするは何ぞ愚なるや。後唐の莊宗帝、淺やく政治に倦み好んで俳優を近づけ自ら藝名を附して李天下と言ふ。右は帝の一日自己の藝名を連呼し、李天下、李天下と呼べるを聽き新磨遽かに帝の頰を撃ちて語れる所。帝之を嘉納せり。敬新磨は俳優なり。

■主上無道。軍民怨望。公從衆則生。守節必死。

康義誠

■主上無道なり。軍民怨望す。公、衆に従はば則ち生き、節を守らば必ず死せん。

意 後唐の莊宗帝の將李嗣源に叛を勧めたる言葉。主上は莊宗帝を指す。

■某胡人。因亂爲衆所推。願天早生聖人爲生民主。

後唐明宗皇帝

■某は胡人、亂に因て衆の推す所となる。願くば天早く聖人を生み、生民の主とせよ。

意 明宗は晉王李克用の養子にして、胡人なり。後唐の祖莊宗の後を繼いで天子となる。性猜忌ならずして人と競はず、右は帝の毎夕、香を炊いて天に禱れる言葉。

■歸語而主。先帝爲北朝所立。故稱臣奉表。今上乃中國所立。爲鄰

稱孫足矣。翁怒則來戰。孫有十萬橫磨劍。相待。景延廣

■歸つて而が主に語れ。先帝は北朝の立つる所たり。故に臣と稱して表を奉る。今上は乃ち中國の立つる所たり。鄰となり孫と稱して可ならん。翁怒らば則ち來り戰へ。孫十萬橫磨の劍あり、相待つと。

意 後晋の高祖石敬瑭の子に次いで帝となる出帝の臣延廣の契丹の使節に語りし所。高祖は契丹の兵を借りて天下を定めたるが故に之に臣事したるも今上、出帝は然らざるが故に此の如くなる能はずと言へるもの、徳川三代將軍家光の諸侯に語れる所と稍々相似たり。

■以_二吾兵力之強_一破_レ崇。如_二山壓_一卵耳。

後周 世 宗 帝

訓 吾が兵力の強を以て崇を破るは、山の卵を壓する如きのみ。

意 崇は北漢王劉崇のこと。北漢王の契丹の兵を合はせ總軍三萬に將として來寇せる時の言。

■賊氣驕。可_レ破也。公引_レ兵乘_レ高。西出爲_二左翼_一。我爲_二右翼_一以擊_レ之。國家安危在_二此一舉_一。

趙 匡 胤

訓 賊氣驕れり、破るべきなり。公、兵を引き高きに乗じて西出し左翼となれ。我れ右翼となつて以て之を撃たん。國家の安危此一舉に在り。

意 匡胤は後周の世宗帝の將、右は帝に従ひ北漢の兵と高平に戦ひし時、禁兵の將張永徳を願

みて之に語れる所。

■兵務_レ精不_レ務_レ多。農夫百。未_レ能_レ養_二戰士_一。奈何浚_二民之膏血_一。養_二此無用物_一乎。

後周 世 宗 帝

訓 兵は精を務めて多きを務めず。農夫百も未だ戰士一を養ふ能はず。奈何ぞ民の膏血を浚へて此無用の物を養はんや。

意 務精云々は精兵を必要とし衆多を必要とせず。帝の侍臣に語れる所なり。

■朕必不_二因_レ喜賞_レ人。因_レ怒刑_レ人。

後周 世 宗 帝

訓 朕必ず喜びに因て人を賞し、怒に因て人を刑せず。

意 一時の喜怒に乗じて賞罰を加ふるは朕の斷じて爲さざる所。

■帝王之興。自有_二天命_一。周世宗。見_二諸將方面大耳者_一。皆殺_レ之。我終日侍_レ

側。不能害也。

宋太祖

帝王の興る、自ら天命あり。周の世宗、諸將の方面大耳なる者を見れば皆之を殺す。我終日側に侍するも、害する能はざるなり。

意 方面大耳は四角の顔と大なる耳。太祖即位の初め民情を察せんとして數、微行を試む。右は侍臣の之を危険なりとして諫争せる者に對して答へたる言葉。太祖の姓名は趙匡胤、後周の世宗の將としては武勳多く擁立せられて帝位に即けり。

■人生如白駒過隙。所好爲富貴者。不過欲多積金錢厚自娛樂。

使子孫無貧乏耳。汝曹何不釋去兵權。出守大藩。擇便好田宅。爲子孫之計。

宋太祖

人生は白駒の隙を過ぐるが如し。富貴を爲すを好む所のものは、多く金を積んで厚く自ら娛樂し、子孫をして貧乏なるなからしめんと欲する

に過ぎず。汝が曹何ぞ兵權を釋き去り、出で、大藩を守り、便好の田宅を擇んで子孫の計をなさいる。

意 人生云々は、人生の須臾の命にして其疾きこと恰も白馬の戸隙を過ぎ去るが如し。太祖石守信等の諸將の職を解き之をして邊疆に守たらしめんと欲し、諭して右の言をなせり。

■唐季以來。帝王數易。由節鎮太重。君弱臣強而已。今莫若稍奪其權。制其錢穀。收其精兵。則天下自安。

趙普

唐季より帝王數、易る。節鎮太だ重く、君弱く臣強きに由るのみ。今稍、其權を奪ふに若くはなし。其錢穀を制し、其精兵を收めば則ち天下自ら安からん。

意 節鎮は節度使及藩鎮。宋太祖の即位後、天下治平の策を問へるに對し普の答へたる言葉。

■世修_ニ降表_ニ李家。

訓世、降表を修する李家。

意 代、降服の書状を草する李氏の家。蜀の宰相李昊、宋の乾德三年蜀王孟昶を勸めて宋に降らしむ。而かも蜀の前王の亡ぶる時の降表を草したる者も亦李昊なりしに因り、蜀人一夜彼が門に右の言を落書せり。

■宰相須_レ用_ニ讀_レ書人_一。

宋 太祖

訓宰相は須らく書を讀む人を用ふべし。

意 太祖未だ前代に存せざりし年號を擇まんとして調査の末、乾德なる年號を定めたりしに其後蜀鑑を觀るに蜀に乾德なる年號の存したりしを知り右の言をなす。

■鼎鑑尙有_レ耳。汝不_レ聞_ニ趙普吾之社稷臣_一乎。

宋 太祖

訓鼎鑑尙ほ耳あり、汝趙普は吾が社稷の臣たるを聞かざるか。

意 鑑は鼎の一種。太祖の宰相趙普を諷れる者を叱責せる言なり。

■吾睡不_レ能_レ著。一榻之外。皆他人家也。故來見_レ卿。

宋 太祖

訓吾れ睡つて著する能はず。一榻の外、皆他人の家なり。故に來つて卿を見る。

意 臥床せるも眠りをなさず。寢臺の外は皆他人の家なり、故に卿を訪へり。太祖は好んで微行し功臣の家を訪ふ。大雪の一夜、帝の宰相趙普の家を訪へるに驚き普その來意を問ふ。帝即ち右の言を以て答ふ。一榻の外云々は、宋の命令を奉ぜざる敵國の多きを言へるものにして、之を卿と語らんが爲めに來訪せりとの意を述べたるなり。一榻とは宋の天下を比せるものなり。

■陛下少_ニ天下_一邪。南征北伐。此其時也。願聞_ニ成算所_一向。

趙 普

訓陛下天下を少とするか。南征北伐、此れ其時なり。願くば成算の向ふ所に聞かん。

意 宋の太祖の一榻の外皆他人の家なりと言ひて未だ征服せざる敵國の多きを述べたるに對して答へたる言葉。此れ其時なりとは、南征北伐を行ふは當に今なりとの意。前項參照。

■ 彼彈丸黑子地。將何所逃。

趙 普
意 彼の彈丸黑子の如くに小なる北漢の地の如き、如何にしたりしとて陛下の征服を免るゝことを得んや。宋太祖の北漢を征服せんことを言へるに對して答へたる言葉。

■ 刑賞天下之刑賞。安得以下以私喜怒專之。

趙 普
意 刑賞は天下の刑賞、安んぞ私の喜怒を以て之を専らにするを得ん。

■ 副將而下。不用命者斬之。

宋 太祖
意 宋太祖、或一人を嫌つて賞すべきに之を賞せず、右は普の之を諫めたる言葉。

意 副將而下は副將以下。太祖の曹彬を將として江南を討たしめたる時、切に生民を暴略するなからんことを命じ更に劍を賜ふて右の言をなす。

■ 爾謂下爲天子容易邪。適、乘快指揮一事而誤。故不樂耳。

宋 太祖
意 爾謂ち天子たる容易なりと謂ふか。適、快に乗じて一事を指揮して誤る。故

に樂まざるのみ。

意 太祖一日便殿に座し頗る樂まざるの風あり。左右其故を問へるに對して右の言をなせり。

■ 此如我心。少有邪曲。人皆見之矣。

宋 太祖
意 是れ我が心の如し。少しく邪曲あれば、人皆之を見る。

意 嘗て宮殿の修營を終れる時、諸門を開放せしめ右の言をなせり。

■ 朕之所與。即爲恩澤。豈有例邪。

訓朕の與ふる所は即ち恩澤を爲すなり。豈に例あらんや。

意 朕の與ふる所は即ち恩澤なり云々。帝の賞賜に對し先例を云々して言議を挾める者を叱責せる言葉。

■二十年夾河戦争。取_レ得天下。不_レ能_下用_二軍法_一約束。誠爲_二兒戲_一。朕今撫_レ養士卒。不_レ吝_二爵賞_一。苟犯_二吾法_一。惟有_レ劔耳。

宋 太祖

訓二十年河を夾_レんで戦争し、天下を取り得て、軍法を用ひて約束する能はず。誠に兒戲を爲す。朕今士卒を撫養し、爵賞を吝_レしまず、苟くも吾法を犯さば惟_レ劔あるのみ。

意 後唐の莊宗帝の英武の資を以て天下を平定し乍ら軍法を以て其臣下を拘束する能はずして直ちに天下を失へるを評せるもの。夾河は黄河を挟むこと。爲兒戲は兒戲の如し。

■學士草_レ制。依_レ舊畫_二葫蘆_一耳。何勞之有。

宋 太祖

訓學士の制を草するは舊に依て葫蘆を畫くのみ。何の勞か之れあらん。

意 翰林學士の詔敕の如きを草するは猶舊儀に依て葫蘆(瓜の一種)を畫くが如し云々。學士閣殿の翰林に在りて其酬_レらるることの薄きを怨めるを聽き右の言をなせり。

■晋王龍行虎歩。且生時有_レ異。佗日必作_二太平天子_一。福德非_二吾所_一能及_二也_一。

宋 太祖

訓晋王は龍行虎歩す。且つ生るゝ時、異有り。佗日必ず太平の天子とならん。福德は吾の能く及ぶ所に非ず。

意 晋王は趙匡胤、太祖の長弟にして帝に次いで宋の帝位に登れる太宗帝なり。右は太祖の之を評せる言葉。

■若一知_二名姓_一。則終_レ身不_レ忘。不_レ如_レ無_レ知也。

呂 蒙 正

訓若し一たび名姓を知らば則ち身を終ふる迄、忘れず。知るなきに如かず。

意 蒙正、太宗に擧げられて參政となりし時、一朝士之を嘲り彼を指して彼も亦參政なるかと
言ふ。蒙正聽かざる所爲して過ぐ。右は其同僚の無禮の朝士の名を語るべきを言へるに對して
答へたる言葉。

■衆以爲金碧燄煌。臣以爲塗膏費血。

田 錫

■衆は以爲らく金碧燄煌たりと。臣は以爲らく膏を塗り、血を費と。

意 開寶寺の塔の前後八年を經、鉅萬の費を要して落成せる時、宋の太宗に語れる言葉。燄煌
は走りかがやく。塗膏費血は民の膏血を以て之を塗り立てたりとの意。

■朕於刑獄盡心。安得積陰之譴。

宋 太祖

■朕、刑獄に於て心を盡す。安んぞ積陰の譴を得たる。

意 或年霖雨度に過ぎたる時、帝の左右を顧みて語れる所。

■臣有論語一部。以半部佐太祖。定天下。以半部佐陛下。致太平。

部之部定

■訓臣に論語一部あり、半部を以て太祖を佐けて天下を定め、半部を以て陛
下を佐けて太平を致す。

趙 普

部之部定

■不須多言。江南亦有何罪。但天下一家。臥榻之側。豈容他人鼾睡乎。

宋 太祖

■多言を須ひず。江南亦何の罪かあらん。但だ天下は一家なり。臥榻の側、
豈他人の鼾睡を容さんや。

意 太祖の江南を征せし時、江南王李煜、徐鉉を遣はして和を乞はしむ。鉉の辭甚だ不適にし
て且江南の罪なくして兵を受くるを怨ざるを聽き太祖大に怒りて右の言をなす。臥榻云々は寢
臺の側に他の鼾聲の囂々たるを許さんやとの意。第三十七議會に於て大養木堂支那問題に關す

— 183 —

— 182 —

る帝國の優越せる地位に就きて、「臥榻の下、他の鼯睡を許さず」なる警句を吐き一時世に喧傳せらる。

■ 彬之疾非_二藥能愈_一。諸公若共爲_二信誓_一。破_レ城不_二妄殺_一一人。則彬病愈矣。

曹 彬

■ 彬の疾藥の能く愈す所にあらず。諸公若し共に信誓をなして、城を破つて、妄りに一人を殺さずんば則ち彬の疾愈ん。

意 信誓云々は誓と立て、城を攻落する時、唯一人と雖も妄りに之を殺すことなくば予の病は癒へん。曹彬の宋の太祖の命を受け金陵城を攻圍せし時、諸將の殺を嗜むを禁ぜんと欲し一日急に疾と稱す。諸將の驚いて彼の許に至りし時、彬即ち右の言を以て之を戒しむ。

■ 在_レ德不_レ在_レ險。

晋 王

■ 德に在つて險にあらず。

意 帝王の恃む所は其德にして山河の險阻にはあらず。宋太祖の長安に都を遷さんとせるを諫

めたる言葉。

■ 吾將_二西遷_一者。欲_レ據_二山河之勝_一。而去_レ冗兵_上。晋王言固善。今姑從_レ之。不_レ出_二三百年_一。天下民力殫矣。

宋 太祖

■ 吾れ西に遷らんとする者は、山河の勝に據て冗兵を去らんと欲すればなり。晋王の言固に善し。今姑らく之に従ふも百年を出でずして天下の民力殫ん。

意 太祖の西方長安に遷都せんとせる時晋王は群臣と共に之を諫む。太祖之に答へて右の言をなせり。山河の勝は山河の險阻。前項参照。

■ 欲_レ得_二天下寧_一。當_レ拔_二眼中丁_一。欲_レ得_二天下好_一。莫_レ如_レ召_二寇老_一。

■ 天下の寧を得んと欲せば、當に眼中の丁を抜くべし。天下の好を得んと欲せば寇老を召すに如くはなし。

意 天下の安寧を得んと欲せば丁謂を去るべく、天下の太平を得んと欲せば寇準(寇老)を召還するに如くはなし。宋の仁宗の時、丁謂讒を構へて寇準を貶す。天下の人丁謂を憎み寇準を慕ふて右の言をなす。眼中の丁は眼中の釘なり。

■小范老子。胸中自有_二數萬甲兵_一。不比_二大范老子可_レ欺也。

訓小范老子、胸中自ら數萬の甲兵あり。大范老子の欺くべきに比せざるなり。

意 宋の仁宗帝時代の名臣范仲淹の選まれて邊帥となりし時、夏人怖れて右の言をなす。老子は尊稱。小范老子は范仲淹のことにして、大范老子は范雍を指す。

■軍中有_二韓_一西賊聞_レ之心膽寒。軍中有_二范_一西賊聞_レ之驚_レ破膽。

訓軍中一韓あり。西賊之を聞いて心膽寒し。軍中一范あり、西賊之を聞いて膽を驚破す。

意 宋の仁宗の時、夏人寇し朝廷韓琦、范仲淹を以て邊帥とす。夏人大に之を恐る。右は韓及范の威望の夏人を壓せるを言へるもの、一韓、一范は、一人の韓琦あり、一人の范仲淹あればとの意なり。

■小人無_レ明。惟君子有_レ之。小人同_レ利之時。暫爲_レ明者僞也。及_レ見_二其利_一而爭_レ先。或利盡而情疎。反相賊害。君子修身。則同_レ道而相益。事_レ國則同_レ心而共濟。終始如一。此君子之明也。爲_レ君者。但當_レ退_二小人之僞明_一進_二君子之真相_一。則天下治矣。

歐陽修

訓小人は明なし。惟君子は之れ有り。小人利を同うするの時、暫く明を爲す者は僞なり。其利を見るに及んで先きを争ひ、或は利盡きて情疎なり、反つて相賊害す。君子身を修むれば即ち道を同うして相益し、國に事ふれば則ち心を同うして共に濟ふ。終始一の如し。此れ君子の明なり。君

たる者、但當に小人の僞明を退け、君子の眞明を進むべし。則ち天下治
まらん。

意 有名なる朋黨論の一節にして、宋の天下を覆没する一原因となりし朋黨比周の弊の漸く旺
んならんとするを見て、彼の仁宗帝に奉れる所なり。

■ 吾一網打去盡矣。

王 拱 辰

訓 吾れ一網に打ち去り盡す。

意 唯一網にて取り去り盡せり。拱辰は宋の仁宗帝の時の御史なり。自己の政敵たりし杜衍等
を一舉に朝廷の外に逐へる時此言をなせり。

■ 惟、宦官宮妾。不知其姓名者。可充其選。

王 素

訓 惟、宦官宮妾其姓名を知らざる者其選に充つべし。

意 宋仁宗の誰か宰相たらしむべしと問へるに對し答へたる言葉。宦官宮妾のその姓名を知ら

ざる者は即ち此等の徒に近づかざる者なるに因り此の如き人物こそ其選に當るべきものなりと
言へるなり。

■ 大姦似忠。大詐似信。安石外示朴野。中藏巧詐。驕蹇慢上。陰賊害
物。

呂 誨

訓 大姦は忠に似、大詐は信に似たり。安石外、朴野を示し、中に巧詐を藏
す。驕蹇にして上を慢す。陰賊物を害なふ。

意 王安石の宋の神宗に擧げられて參政となるや、人々其人を得たるを慶し必ずや太平を致す
べきを言ふ。獨り御史中丞呂誨之を非として彈劾す。右はその一部なり。

■ 洛陽舊無杜鵬。今始至矣。天下將治。地氣自北而南。將亂。自南而
北。今南方地氣至矣。禽鳥飛類。得氣之先者也。不二年。上用南士
作相。多引南人。專務更變。天下自此多事矣。

邵 雍